

試し読み版  
です。

毎朝快便ガール小説誌

# 朝のむずむずと

おなかの  
もやもや

18禁  
成人向け

# 朝のむずむずとおなかのもやもや 試し読み版 目次

恥カノ。早起きメイドちゃんと朝の忘れ物 ……002

著：もちづきうずめ 表紙イラスト：毒桃

朝の秘め事、君の傷痕 ……020

著：とん

朝の日課を私にさせて ……028

著：軟球ごるふ

三人の少女、二つの結末、一つの日課 ……032

著：A J

参加者紹介 ……044

恥カノ。早起きメイドちゃんと朝の忘れ物

もちづきうずめ

はじめ  
初鹿野かんなの朝は忙しい。

文月の頃、七月。もう陽が昇った午前六時。スマート機器で管理されたカーテンが自動で開き、陽射しがかんなを暖かく包み込む。

日射に身体が反応し、きっちり七時間睡眠を終えて目を覚ます。

まどろむ間もなく上体を起こし、ベッドから床に降り立った。仕えるべき主の二度寝をたしなめ、朝の支度を滞りなく務める彼女に睡魔は棲み着いていない。

掛ふとんがめくられて、少女の体温が部屋に染み渡る。名状しがたい、甘い少女の匂い。熱でとろけた、肌の匂い。

起きてすぐ、身だしなみを整える。化粧机の前に座り、鏡の前の自分／かんなを見つめる。

眠気も残らないすっきりとした目覚めだったが、少し半目気味の左目が私／少女を睨み返す。右目は前髪に覆われており、鏡面が左右対称に映す無表情。大人しさ或いは冷静さを貼り付けた、冷艶じみた風貌であった。

かんなは鏡に映る少女の姿を頼りにして、前髪を、背中まで伸びた後ろ髪を櫛で優しく梳いていく。そうして絡まりと跳ね返りを解すと両手を後頭部に回し、後ろ髪を編み始めた。左右の側頭部に橋を架けるロープ編み。気まぐれに編んだ髪型をお嬢様に褒められてから一年半、鏡を頼りにせずとも流暢に架橋できるまで練達したが、お嬢様に完璧な自分を見せるため、丁寧に丁寧に髪型を整える。

今日のヘアピンを選んで装飾し、姿見の前に立つ。

姿見の上部を大きく余らせる、一四五センチの矮躯。痩せ気味でふくよかに欠けた女兒めいた容姿の、一五歳。

視線を走らせて装いを確認。薄いピンクのチェック柄パジャマ。お嬢様がかんなのために選んでくれた、お気に入りの一着。平手でしわを伸ばし、部屋を出る。

部屋のすぐ隣はお嬢様の私室だがまだ起こさない。洗面室で顔を洗い、階段を降りてキッチンへ。

お嬢様のプレゼントしてくれたエプロンを着用し、台所へ立つ。パジャマの淡桃より明るいピンクと遊び心に満ちたリボンの数々。高校生には似つかわしくない、子供向けの柄と丈だが気にしない。

まずはコップ一杯の水を飲み干し、無駄のない手付きで食事の用意をしていく。自分とお嬢様、ついでに養父の朝食の準備……と平行之二人分のお弁当も作っていく。

(今日の卵焼きは甘くしましょうか)

火を入れたお味噌汁の鍋を見守りながら四角のフライパンで卵を巻いていく。朝食用と弁当用に朝から手の混んだ、だし巻き卵。

『樹里半熟のが食べたいー!』ここしばらく弁当に卵焼きを入れると決まってわがままを言われるのだが、夏場はしっかりと焼くのがかんなの矜持。かわいい主を甘やかさないのは当然として、食中毒のリスクを未然に防ぐのも使用人の務めだ。

六時五五分。四〇分たつぷりかけて朝食と弁当を用意し、エプロンを脱いで廊下に出る。

現在地は都内の一等地を占有するお屋敷、その西棟。住人の生活

空間を集結させた居住スペース。まだお嬢様の眠る私室に繋がる階段——を通り過ぎて東棟に足を踏み入れる。客間があるものの物置部屋や空室で持て余す、用のないことの多い場所。

初鹿野かんなの朝は忙しい。

平日は起きてから登校するまで、全ての時間はお嬢様のために。そんな限りある朝の時間に誰もいない東棟に赴く理由。

東棟一階応接間の向かいにある二枚の扉。男女を模したピクトグラムの掲げられたそこは初鹿野家に三ヶ所あるトイレの一つだった。

かんなは赤のドアを開け、施錠。洗面台スペースを挟んでもう一枚のドア、その先が便器のあるトイレ。客用に男女を分け二重の鍵付き扉が設けられている。

高級木材をあしらった壁面と床面には一息つける落ち着いた雰囲気醸し出しており、温水便座付きの洋式便器は使われていなくても毎日掃除されており清潔。窓に添えられた一輪の花が日光に洗われて輝いていた。

居住スペースである西棟から離れており、家族もハウスキーパーも滅多に使わないトイレである——かんなを除いて。

便座のフタを開け、お尻を便器に向けてパジャマのズボンを下ろす。小さいリボンが飾りでついている白いショーツが露わになる。無地かつ装飾のない下着が好みのかんなにとって妥協点——『地味な禁止！ かんなもかわいいのはこうね』と善意でお嬢様が見立ててくれた内の一枚。

ショーツとズボンは膝で留め、深々と便座に腰掛ける。小ぶりだが女性らしく脂肪を蓄えた臀部と太ももがひんやりとした便座に接

地した。ほんの少し膝を開き、パジャマの上着と肌着の裾を掴んで胸の前まで捲くり上げる。なだらかにくびれた腰とへそ、そして丁寧に整えられた陰毛が生え揃う少女の陰部が外気に晒された。便座に着衣が触れないようにする何気ない所作だがいささか高く、干したてのタオルのように柔らかな肌白のお腹が丸出しになっている。痩せても太ってもいない、健康管理と維持の徹底された健康体そのものだった。

「ん……」

ちよろろろ ちよろろろじよぼぼぼぼ……

ちい—— ちゅううううじよろじよろじよろじよろ

少女の陰裂から、ゆるやかな弧を描くおしっこが放たれる。就寝直前に済ませてから夜間に溜め込んだ薄黄色の老廃液。かんなは斜め上を仰ぎ見ながら、黄色い熱が抜けていく開放感に身を預ける。

たっぶりの尿で便器を薄く染め、朝一番の排尿を終えた。用を足したかんなはお腹を丸出しにした姿勢そのままに少し背中を伸ばした。普段の礼儀正しさ、姿勢の良さが垣間見える。

（さて、今日も済ませて一日健康に過ごしましょう）

呼吸。腹圧。開口。先刻排尿をした恥裂のわずか下、ぎゅつとしわの集中した孔から鮮やかなピンク色がめくれ出る。下腹部への集中、内から外へ出そうとする息み、朝食準備中の終わり際から感じていたむずむずした感覚。

（大便、出そうになってきました）

排便欲求——便意で目を覚ました肛門が昏い孔を拡げていく。

七時前。かんなの日常と化している、排便の時間。

平日も、休日も。かななは決まって毎朝この時間に、誰も来ない客間のトイレで大便を済ませることが習慣づいていた。

(今日もいい感じの便意です)

起き抜けに飲んだ冷水がお腹を刺激し、そして身体に染み付いた習慣が自然に腸管を目覚めさせる。

「ん、ふっ、んん……」

かすかに声を漏らしながら、かななは息む。喜怒哀楽を顔に出さず淡淡とした口調が冷たい印象を与える彼女から、少女らしい息み声があふれる瞬間。気を遣う他人もいない、順番を待つ家族もいない。太陽の光と一輪の花だけが満たす極上のリラックス空間で。決して誰にも見せたくない痴態を、曝け出す。

「……っ、ん、んん」

ぎち ぶくく にち ねち

肉の壁をこじ開けて、臭い立つ黄土色が姿を現す。徐々に、ゆっくりと、勢いづくこともなければ一時停止もなく。お腹の中から外へと、老廃物が着実に這い出ていく。

(もう、少し)

みちち みちち みちち……にちにちにち

(んっ、出そう。あつ、ズボンが)

にちちち…… ばさっ

息むときに膝を動かしたせいでズボンが足元まで落ちてしまった。(いい調子なので、このまま……大便)

外のトイレなら即座に腰をかがめてズボンを上げるが、ここはかななの家。毎日掃除やマットの入れ替えをしている安心感からその

まま息み続ける。

上着を胸の高さまで上げているせいで胸から下をすっぽんぽんにして息んでいる様は、見た目の幼さも相まって倒錯的な魅力を撒き散らしていた。

みちみち みきっ むちち

拳一個分が肛門から押し出されると、あとは重さと活気づいた腹圧でずるずると伸びていく。かななは背を伸ばした姿勢を崩さず、そつと左手をお腹にあてがい優しく擦る。

「ふ、ふん、んッ」

(ん、出る)

みちみち にちにちにちにち ぶりっ ぼちゃん

「はあっ」

淡黄色の水たまりに、黄土色が落ちていく。一本の形状を保った、バナナうんち。硬くも柔らかくもない健康便がつるんと出る。食生活が整っていて毎朝のお通じがあるかななを象徴する健康の証が便器に浮かんでいた。

(今日も大便が出せました。ん、でも、まだ便意が……まだ出る)

直腸にまだ老廃物が残っているようで、肛門は半開きであえぐように呼吸をしていた。少し和らいだ便意に後押しされて、更に息む。

「ん、ん、う……んっ。んっ、ふっ。ん……んん！」

にちにち むりむりむりっ ぶりっ とぼん

起きてから終始無表情だった少女が、艶めかしい表情で切なく息む。どんな女の子にだって訪れる、汚物を出す瞬間。朝日の下、静かなトイレで。少女の隠し事が、秘めやかに。元気なお腹が女の子

の頑張りに応え、直腸から括約筋へ、便を送っていく。

むりり にちにちにちっ むりりっ むりゅ ぽちゃん

むりむりむり ぶりぶりぶり……ぶりっ！ とぶん

「んっ、はあっ」

一発目の大物よりはだいたい細く、柔らかめの便がするする、ぽちゃん。 kannaのお尻の孔から立て続けに、小気味よく黄土色の健康便が吐き出された。柔らかいといっても軟便質ではなく、水面に叩きつけられてもぼろぼろにならず浮かんでいる。

(ふうう……大便、全部出ました)

便意の消失と解放感がリンクする、快感。そして快便。

朝の陽射しを浴び、おなかすつきりきもちいいの、おんなのこ。

(今日はいい感じに便意も来てましたし、早めに出てくれましたね)

紙を短めに巻き取り、まずは尿で濡れた陰裂を。次は少し長めに巻いてお尻の後ろから手を差し込み、前から後ろへお尻の孔を拭き取る。微かに付着した黄土色を確認して折りたたみ、もう一度。今度は汚れ一つなく、そのまま便器に落とす。キレイくまとわりつかない、いい大便が出たようだ。

いそいそとショーツとズボンを穿き上げ、便器を見下ろす。実の詰まったバナナうんちに細いうんちが積み上がった。

(今日はいっぱい出ましたし、これで一日安心ですね)

水を流し、流れきったのを見送ってフタを下ろして退室。洗面所で手を洗い、三分ぶりに廊下に舞い戻る。

(大便ができて、すつきりです。お嬢様を起こしにいきましょうか)

七時。熟睡するお嬢様を起こす時間。kannaの私室の隣、お嬢様

と暮る樹里の部屋にノックをして入室。

「お嬢様、朝ですよ。朝ごはんが出来てますから起きましょうね」

「んー。やだあ」

お布団の中から、甘酸っぱいふやけた声。

「樹里お嬢様、まだ起きられませんか」

「あとねえ、六分くらいー」

「樹里ちゃんは一人で起きられないお子様ですか」

「んむう、起きれるもん……!」

がばつと布団を跳ね上げ、上体を起こすねぼすけさん。

「おはようございます、お嬢様」

「おはよお、kanna」

目覚めきつていない音の抜けた声で挨拶をする、この子こそがkannaがお嬢様と慕い、愛する初鹿野樹里だ。

二度寝をしないよう部屋を出るまで廊下で待ち、「樹里おしっこしてくる」と寝起きのトイレを見送ってからキッチンへ戻る。その間に養父の幹臣みきおみの部屋に寄り、軽く朝を告げるのも忘れない。スープを温め直し、樹里が降りて来たら一緒に朝食を摂る。

食後も自称使用人の気が休まることはない。樹里が紅茶を飲んでる間に食器を洗ってから、一緒に歯磨き。髪を梳いたら好みのリボンを結んであげて、寝間着から着替えさせたらナチュラルメイクを施してあげて――。

「お嬢様、どうですか」

「うーん、うーんっ。んー……うんち出ないー」

登校前に樹里を二度目のトイレに行かせ、大便をさせる。

「今日もうんち出なかった……」

便秘がちで排便が不規則なため、朝の排便を習慣づけさせようと毎日トイレに促しているのだが、今日も不発のようだ。

「月曜日に排便してから三日目ですか。ちゃんと息みましたか」

「樹里ががんばってうんちしてしたもん。全然うんちしなくなかったから出るわけないじゃん」

「こうやって朝にトイレでがんばることを体に覚えさせるのが大切なんです。明日は大便が出るといいですね」

「うん。学校でうんちしたくなるの、やだもんね」

（まあ、私も朝の排便習慣を完全に身に覚えさせるのは時間がかかりましたし、気長にやりましょう）

七時三〇分。外に出ると真夏の太陽が二人を照りつける。

「トイレも暑かったけど、お外も暑いね」

「この時期は蒸し風呂のように感じます」

「だから朝にこもるのやだなあ。夜じゃだめなの」

「朝すっきりして一日楽しく過ごすのが一番いいと思います」

樹里はため息一つ吐いて、立ち止まった。横並びのかんなもまた合わせて歩みを止める。

「どうかされましたか？」

「いつも樹里に毎朝無理やりトイレに入らせるけど、かんなは毎朝うんちしてるの？」

熱射でひき始めた汗が、ぶあ。と溢れ出す。

「無理やり、ではないですよ。トイレ行きましようね、と優しく促しているのではないですか」

「今日はおなきそうって言ったのに、樹里ちゃんうんちががんばりましようねって引つ張ったでしょ。無理やりじゃん」

と言いつつも最後のお通じから三日目の危機感はあるのか、洪々トイレに入っていたのだが。

「ですから毎朝トイレに座る習慣づけが大事なんですよ」

（よかった、話題を反らせましたね）

「それはわかるけど。で、かんなは毎朝うんちしてるの？」

無邪気な透明、純真な瞳が汗かく少女をずっと見つめる。

「私は、えっと、その、あ、あの、」

「してないのに、樹里に無理強いしてるんだ。かんなが朝してないなら樹里もしない！ 夜にうんちする！」

「えと、あ、……」

何度も失敗した発音を喉から鳴らし、ようやく声を紡ぐ。

「かつ、かんなは毎朝してます、から」

「何を？」

「ええと、………大きい方、です。早起きして、ちゃんとしてます。だから樹里ちゃんも毎朝快便になりましようね」

「ふーんそっか。早起きがいいの？ 樹里も早起きしようかな」

「ふふ、できないことを口にしてもできませんよ。ねぼすけ樹里ちゃん私が起こすまでねんねしててくださいませ」

「ねんね!? 子供扱いしないでね。明日から六時に起きるからもんでも起こしに来なくていいよ。一人で起きられるから」

こうして一緒に登校し、かんなのいつも通りの日常が始まる。初鹿野かんなの朝は忙しい。

朝食とお弁当の準備、起こすことからトイレの誘導までお嬢様のお世話。そして、こっそり大便を済ませること。

かんなの家であり、気を遣う必要は一切ない。それこそ人気のないトイレまで足を運ばず、居住棟の一、二階にあるトイレを使つて家族の誰も怒らない。それでも。

（深く聞かれなくてよかった。お嬢様に、できるだけ私が大便をしているところを知られたく、ないですから）

「一人で早起きできなくても問題ないですよ。お嬢様を起こすのは、使用人であるかんなの役目ですからね」

「だから起きられるつてば！ それと家族なんだから自分のこと使用人つて呼ぶのだめつて言つてるのに」

陽射しの橙は、どこで浴びても変わりなく。朝のトイレでも、通学路でも。おんなじ橙が、かんなを見ている。

完璧な自称使用人は、初鹿野かんなは愛するお嬢様にうんちをしていると、知られたくない。

\* \* \*

翌日。週末を間近に迎えた金曜日であろうとも、初鹿野かんなの朝は油断なく忙しい。

定時に目覚め、変わりなく髪型を整え、朝食とお弁当は飽きないように献立をアレンジしつつも。

多忙なかんなが朝に一息をつける瞬間。身支度のときは忙しい樹里がトイレで踏ん張っているときと、朝食準備後の、トイレのひ

とき。

ちよろろじよぼじよぼじよぼ……ちよろろ しょわつ窓越しに暖かい橙色が差し込む客側側のトイレに、黄色いせせらぎが響き渡る。

「ふう。……んん」

（今日も排便を済ませて、元気に過ごしましょう）

かんなの排便は、一日のスタートの合図だ。お腹に溜まった不要物をしっかりと排出して、心も身体も軽くする。便秘ではなくとも不定期な便意だった体質を半年かけて改善させ、今では毎朝快便——むしろ朝に便通がなければむずむずして勉強や家事に集中できないほど健康な体質になった。

決まったときに、ちゃんと大便ができる。とある事が気になつて自由にトイレに入れないかんなの、元気の支えである。

すりすり ぐるぐる

（今日はあんまり便意が来せんね）

朝一にコップ一杯の水を飲み、空っぽのお腹を刺激してお腹を起こす。かんなはだいたい二〇分程度で便意を催すようになったが、今日はまだお腹が寝ぼけているようだ。それでも決まったタイミグでトイレに入る習慣は身体に根付いているおかげで、時間をかければ便意を催す。

（時間はありますし、ゆっくり息みましよう）

「ふ、う、う、んっ。……んっ」

パジャマを捲つて露出したお腹を擦りながら、じつくりと息む。便意がないためか普段よりも漏れる声は大きい。すぐに大便が出な



い、このときだけは大人びたかんも子供のように声を出してしま  
う。自宅だからこそ垣間見せる、隙だった。

(なかなか大便がしたくなりませぬ)

朝の陽射しに見守られ、静かなトイレで息を吐く。このときだけ  
はかんなの無表情も変化する。誰も見ることでできない閉ざされた  
世界でお腹に力を入れているときは顔にしわを寄せ、桜色の蕾から  
消化物をひり出す瞬間はほっと頬を赤らめる。

朝、人氣のないトイレ、晴天。静けさに包まれて、朱い息遣いは  
換気扇に吸い込まれ。陽射し降り注ぐ静寂の音に抱擁されて、かん  
なはお腹の中で弛緩と緊張を円環させる。

息む。圧す。膨らむ。吐く。縮む。少女は排泄をする。

「ん、んんっ。ふう、はあ。う、んっ。んっ……あっ」

険しく息んでいた少女の声がぐつと上ずった。

(便意が来ました……やっ和大便が、出そうです)

大便が直腸に達し、送られた排便のサイン。お尻の出口の膨張感、  
むずむずするこそばゆい感覚。更に腹圧をかけ、もつと下へ下へ、  
力を送り込む。

「んっ。んー、んっ。う……んっ」

(出そう、大便、もう少し……あ、出る)

「ううんっ。う……」「かななあー」「ん……っ!?」

外に出かかっていた便の先端が暗がりに引っ込んだ。

「かななあー。どこおー!」

(お嬢様っ!?)

遠からず、近からず。客間のトイレまで聞こえてくる樹里の声。

七時前、この時間には決して起きてこないはずの主の呼び声に慌て  
てトイレトペーパーを巻き取り始めた。ぐしやぐしやの紙の束で  
恥裂を強く擦り、畳んで肛門を拭き取る。汚れがないことを確認し  
て便器に落とすつ水洗、流水が落ち着くのを見届けもせずに個室  
を飛び出し、乱雑に手を洗う。落ち着いていて、優雅、まさに使用  
人といった風の完璧なかなにしては、あまりに取り乱している。

しかし洗面室から廊下に出るときは、静かに。まるで何事もなかつ  
たかのように歩いていく。

「あつ、かな、いた!」

西棟と東棟を繋ぐ玄関、廊下の一直線上にいた樹里が手を振って  
いる。あくまで落ち着き払いつつも樹里の元へ。

「お嬢様、おはようございます。今日はお早いんですね」

「うん、おはよ! 全然早くないよ! 樹里早起きするって言った  
のになんで起こしてくれないの!」

「ああ、本気だったのですか。一人で起きられるから起こさないで  
いいよと言ったのは、どなたでしたっけ」

どうやら昨日の早起き宣言は、本物だったらしい。かなに煽ら  
れたというのも理由の一つだろうが、朝はかなに頼りつきりのお  
こさまにしては十分な成果だろう。

「樹里そんなの言っていないもん、多分。それはそうと、どうしてこっ  
ちにいたの? トイレから出てきたように見えただけ」

「それは……」

ごまかしたつもりでいたが、やっぱり聞かれた。冷房もないトイ  
レでかいいた汗がつつ、と頬を伝う。

「トイレしてたの？ わざわざ遠いトイレで？」

「備品の点検をしていたのですよ。ちゃんとロールや手洗い石鹸があるか数えていたのです」

「そうなの？ 今しなくてもよくない？」

「ちよっと時間が余ったときに仕事を進めるのができる使用人なので。さ、朝食はできてますからダイニングに行きましょう。おいしいオムレツができてますよ」

「やった！ かななの作るふわふわのオムレツ好き〜！」

食べ物で丸め込まれ、うきうきでダイニングに向かう樹里。

むずむず そわそわ

後ろを歩くかなは、少し憂い顔。

（もう少しで大便ができたのですが……。う、出る寸前で止めてしまったせいで、お手洗いじゃないのに大便が出そう……）

お尻のお肉を内側に寄せつつも自然に歩く。息んでやっと引き出した便意が容易に消え失せるはずもなく、直腸に足止めされた大便から排便のサインが溢れ出す。

（お手洗いに行きたい、です。今ならすぐに出せるはず。朝食の前に大便……しかし）

ダイニングの前、既に樹里は室内に入っている。一階のトイレはすぐそこにあり、誰が用を足してもいい場所が開放されている。

——お嬢様、先にお手洗いを済ませてきてもいいですか？  
（素直に言えたら、どれだけ楽でしょうか）

トイレ？ いいよ。樹里待ってるね。想像の中のお嬢様が都合のいい返事してくれた。

（今お手洗いにいったら、お嬢様に大便をしに行ったと思われるしまうかも、しれません）

すぐそこにお嬢様がいる中で少なからず時間のかかる大便をしてしまえば、『かななうんちしてたの？ ほんとに朝にしてるんだ』と無邪気に聞かれる可能性がある。

もしかしてうんち？ さっきうんちがしたくて遠くのトイレに行ってたんだ。かななの嘘つき。しょんぼりした表情は想像の産物だったが、本物の刃めいてかななの心に突き立った。

（それに客間のお手洗いにいた嘘がバレたら。わざわざ遠くのお手洗いでこっそり大便をしていると思われるたく、ないです）

誰かに起こされないとベッドから出られない樹里が万が一、自力で目覚めてトイレに入ろうとしても鉢合わせない場所。それが客間のトイレであり、かななが朝に安心して大便ができる場所である。

（不審に思われて説明を求められたら、かななはもう……）  
きゅ。お尻を締め、ダイニングに入る。

「おや、幹臣様も起きていらつしやいますね。おはようございます」

「樹里が起こしたの！ えらいね！」  
「かわいい樹里ちゃんに起こされたら一発で起きちゃうよ〜」

最近はかななが起こしても一緒に朝食に間に合うことの少ない養父が既に食卓に着いていた。褒めてね一色の笑みを向けてくる樹里が眩しすぎたので、コーヒーを準備しつつ顔はテーブルへ。

「お嬢様はえらいですね。しかし幹臣様は私のモーニングコールでは不満ですか。そうですか」

「拗ねないでよかななちゃん〜」

「別に拗ねてませんよ」

(我慢したら便意が収まりました。さて、どうしましょうか)

とぼん。カップに注がれる苦水が波紋を打つ。跳ねる黒い雫の足音は、かんなが出し損ねた茶色が落ちるときに音によく似ていた。



かんなが排便行為に名状できない恥ずかしさを自覚したのは、一年前のことである。

それまでは。初鹿野家の養子となるまでは／姓を新たにして半年くらいは。特に気にしていなかった老廃物を排出する生理現象を、意識することはなかった。

然るべき時ならばどこでも、誰の前でも。学校でも外出先でも、同級生がいても友達と一緒にでも。催せばすぐに便意を告白し、トイレで自由に用を足していた少女は。

自宅で運悪く腹の調子を悪くしてトイレを出た後、すぐさま樹里に入られてしまい——言語化できない恥の感覚を知った。

『申し訳ありません。ちよつとお腹の調子が悪くて……臭いが』別に気にしないでいいよ。かんなの後ならいやじゃないし、樹里だってお腹痛くなるときあるもん』

樹里が小用を済ませる一分強の間、かんなはドアの前から動けなかった。恥ずかしくて、言い訳をずっと考えて。

『あれ、どうしたの。まだお腹痛い？ 樹里済んだからいいよ』

『違うのです、えっと、あの、おトイレじゃなくて、』

『樹里気にしないからトイレしていいよ？ すぐあっち行くから』

『あの、う、うんこじゃ、なくて、つ、かんなは、謝りたくて』

『何も謝ることないと思うけど……。もうお腹は大丈夫？ 具合が悪いときはすぐに教えてね！ つらかったら樹里がいっぱい助けてあげるね』

樹里の言葉は素直である。純真な心の持ち主の、心からの言葉は溶け込むように聞く人の中に染み渡る。そんな樹里の真っ直ぐな想いに惹かれ、今のかんながある。

本当に樹里はかんなが下痢をした後のトイレを使っても嫌な気持ちにならなかった。それどころか大切な家族の具合を心配さえしてみせた。家族なら、家族になった二人なら当然のことかもしれないし、かんंनाだつて樹里がお腹を壊していたら汚いなど一切思うことなく病状を慮るし、不運のときは躊躇なく片付けだつて手伝う。

それでも。不快な臭いの残るトイレを敬愛するお嬢様に使わせたこと。自分の腹の中にあつた汚物の存在を知られたこと。

——うんこをする。人として当たり前で、だけど人前では秘されるべき、恥ずかしい行為が知覚されたこと。今までは何の感慨も抱かなかつたことが、急に恥ずかしく思えてきてしまった。

お嬢様の前で、できるだけトイレに行きたくない。

その日からかんなは、決まった時間に大便ができるように。お嬢様の起きてこない早朝に排便ができるように。安心して排便ができるようになるための、乙女の努力が始まった。



食後、樹里がテレビを見ながら紅茶を飲んでいる間に食器を片付ける。シンクに隠された裏では太ももをすり合わせる少女の姿。

（食べたらまた、便意が……。大便が、したい）

白いお皿、白いサラダボウル、白い便器。泡を濯がれ輝きを取り戻す陶器の白が想起させるのは大きな陶器の椅子。

（この後は歯磨き、お嬢様の身支度のお手伝いをして、お嬢様のトイレを見守って、一人になれる時間がほとんどありませんね）

考えを巡らせてトイレに入るタイミングを探る。それも、一人でこっそりと寵もれる瞬間を。

（お嬢様の排便の後なら当然入れますが、それではだめです。お嬢様を待たせながら大便だなんて……）

排便を済ませただけなら一択である。主である樹里を先に排便させてから、自分も同じトイレで用を足せばいい。しかしそれは用の最中に樹里を待たせることに他ならず、時間や音もしくは直感でかんなが大便をしていると告白することに等しい。

朝食前に排便をするリズムを刻みつけてからは、朝に樹里が起きてからトイレに入ることが減まらなくなった。今日たまたま出し損なった朝の荷物を下ろすためにトイレに行くと言げれば、大便だと思われるだろう。

（できればお嬢様が何かをしているときに、離れてもいい機会に。そうなるをやっぱり……）

「お嬢様、そろそろ歯磨きをしましょうか」

うん、とテレビの占いを眺めるのもそこにティーカップを持つ

てくるのでさつと洗い、二階の洗面室へ。大きい洗面台の前で二人

並び、タイマーを使って五分間丁寧に歯を磨くことが主従の日課だ。

樹里が愛用の歯ブラシに練り歯磨き粉を絞ったタイミングで、

「お嬢様、私は仕事が残ってますので今のうちに片付けてきますね」

「え？ だめだよ。歯磨きは一緒にするって決めたの可不是だよ」

きょんとした瞳がなんなの、嘘に濁った双眸を見つめる。

「今日歯磨きしないの？ そんなに急ぎなの？」

たまにめんどくさがる樹里が正論を突きつけるため、かんなは適切な返しができず「では、後にします……」と折れるしかなかった。

（最低五分間ある内に用を足そうと思ったのですが）

しゃかしゅか。口内で泡立つミント風味。一方で口とは正反対、食べ物の出口は不穏な感覚が泡立っていた。

（食後の便意が、きついです。う、大便がしたい）

さり気なく後ろに下がり、お尻を締める。お尻の孔の中は歯ブラシなんか使わなくても綺麗になる。便座に座ってちよつと思ひだけ。洗面室の隣にはそのための部屋がある。

「あ、五分経ったよ。歯磨きおわりー」

かんたとペアのコップを使って口を濯ぐ樹里。便意が気になってしつかりと磨けなかったがかんさも口内を水で濯いだ。

次は何も示し合わずとも樹里の部屋に行き、髪セットと着替えを手伝う。洗面室から樹里の私室に向かう道中に、今もつとも寄るべき場所を通る。男女共用の、洋式トイレ。

『お嬢様。大便がしたいので身支度の前にお手洗いに行ってもよろしいでしょうか？』

（とてもじゃないですが、言えませんが。お嬢様に大便がしたいと言うだなんて、恥ずかしいです……！）

努めて取り繕う無表情の裏は羞恥の朱で塗り潰されている。汚いものを出す。臭い物体を放つ。穢らしい音を鳴らす。その行為を気取られることが、とてつもなく躊躇われて。

（きつとお嬢様はいいいよ、と言ってくれるでしょう。でも、大便をするって思われたくないです。それにこの後同じお手洗いに、お嬢様が入ると思うと……）

心拍を止めて数秒。通り過ぎて樹里の部屋へ。父親譲りの天然パーマでぼさぼさの髪に櫛を通し、アイロンを駆使して縮毛を伸ばしていく。ただし毛先は遊ばせたまま。毛先だけは本人みたくわがままで、真っ直ぐにしてもすぐ戻ってしまう。ならば活かしてゆるふわお嬢様を演出してあげるのがかんなの仕事。

髪がぼつちり決まったら、側頭部で結うリボンを選ぶ。樹里が好みで何本も買ったものからその日ごとに選ぶのだが、結局「これにしてね」と薄桃色の二本を手渡す。かんなが贈り物をしたリボンが一番のお気に入り、週に五回は同じものを結ぶ。

結んであげたら、着替えの時間。いくらおこさまお嬢様でも一人に着替えられるので、その間にかなもパジャマを脱いで制服に袖を通す。

（お嬢様が着替えている間に大便を済ませましょうか。ストッキングを履くのも含めて三分くらい。今の便意ならすぐ……）

思い至って、すぐに頭を横に振る。用を済ませた後にトイレの前で鉢合わせたら。すぐ出しても臭いがごまかせなかったら。

『かなトイレしてたの？ もしかしてうんち？』

『うんちのにおいした……。かな、ほんとに朝うんちしてるんだ』

（やっぱり、お嬢様がトイレにいる間に済ませましょう）

着替えの後は、樹里の二度目のトイレの時間。一度寝起きに小用で入っているが、食後に起きたお腹で排便させるため時間を割く。便秘がちなのですると出るとは稀で、出なくても三分から五分は息んで排便の習慣をつけるように促している。つまり、最低でも三分は樹里がその場から動かない時間ができる。

「お嬢様、着替えられましたか。今日もかわいいですね」

「かわいいのは当然でしょ。んふふ」

（照れるお嬢様かわいいです）「さて、今日もお手洗いに入ってがんばりましょうね。大便は出そうですか」

「樹里もうんちしたいけど、まだ全然したくなってるない」

「四日目ですから座ってたらしたくなりますよ」

「うん。樹里がんばってうんちするね」

通学鞆をかなに預け、意気込んでトイレに入っていく。

「私は残した仕事があるので離れますね。樹里ちゃんは私が見ていなくてもうんちができますか？」

「できるよ！ 子供扱いしないでね」

「それなら安心です。今日は大便が出なくても、五分はうーんってしましょうね」

「ん、がんばる！」

「朝のうんちに挑戦するお嬢様はえらいです。では」

樹里の鞆を拾い上げ、早足で廊下を駆ける。目指すは二階トイレ

の真下、構造は全く同じの一階トイレである。

(うう、お嬢様の前で便意を堪えるのは疲れました。早く、早くお手洗いで大便を……！)

玄関に自分と樹里の鞆を置き、一階トイレへ。客間のトイレは遠いというのもあったが、時間がかったときにまた姿を見られたらごまかせない可能性がある。近いトイレで用を済ませ、先に樹里を待っていることができればスマートだ。

(やっとお嬢様にバレないで大便ができます。ん、便意が……)

食後の大波、やっとトイレに行けるという安心感で肛門がぷくつと膨らむ。まだトイレに入っていないのに、先走った便意が今にも便を押し出そうとしていた。

(ようやくお手洗いに、入れ、る……？)

ドアノブに手をかけようとした瞬間、ドアの鍵窓が赤くなっていることに気づく。——瞬間、利用中の誰かの存在と、その理由がみんなの脳裏を駆け巡った。

(そうでした！ 幹臣様は食後に何十分もお手洗いに籠もられるのでした……！)

三人で楽しんだ朝食後、スーツに着替えた幹臣は一階のトイレに籠もり、新聞をお供に用を足す。樹里の便秘体質は親譲りではないかと思うくらい長い。自分の便意をどう解消するかに精一杯だった自称使用人は、平時ならすぐに思い至る日常の出来事を忘れ去っていた。

(いつ出てくるかわからない幹臣様を待っているは大便ができないです。幹臣様に大便をすると知られても全然気になりませんが、時

間がかかったらお嬢様を待たせてしまいます。それに)

『かなちゃんなら今トイレにいるよ』

『仕事があるって嘘だったの？ かな、うんちしたかったんだ』

デリカシーのない養父の一言によって隠し続けていた便意が露見することは想像に難くない。

(大丈夫ですまだ時間はありますこのまま客間のお手洗いまで走って便意は充分ですから座ってすぐに出したらさっとお尻を拭いて玄関に戻れば問題ないはずです)

時は金なり。便意に翻弄されても完璧メイドちゃんの判断は早い。すぐさま踵を返し客間のトイレへ走る。この機を逃せば自宅ですり大便を済ませる時間はない。

(通学中や学校でも大便はできませんがお嬢様が一緒にいない保証はありません。なんとしても今、大便を)

冷や汗をかきながら玄関に到達し、走るような速さで東棟への廊下へ踏み入れようとした刹那。

「かなー？ かなあー！」

(大便が、したいのに……！)

階上からお嬢様の呼び声があれば行かないわけにはいかなかった。無視して用を足すこともできようが、悲しいかな使用人の性である。

「かなー！ ねえ、いないのーっ」

「はあ、はあ。お嬢様、おまたせしました、どうか、しましたか」

「紙がもうちょっとしかないよ。樹里お尻拭けないよ」

「収納のところに、」ないもん。取ってきてー」

(私としたことが、ロールの補充を忘れるとは……！)

「わかりました、少しお待ちくだ——うっ」

（だ、大便が出る……出そうっ）

走ったせいか、入れないとはいえどトイレの前にいるせいか。閉ざされるべき肛門が開きそうな感覚に咄嗟にお尻を引き締めた。背伸びの姿勢で洗面室に赴き、未使用のロールを一巻き取って戻る。

「お嬢様、ドアの前に置いておきますね」

「鍵開いてるから開けて持ってきてー」

「でもそれではお嬢様が」

「今いい感じなの！ 立ち上がったらうんち引っ込んじゃう」

（お嬢様は大便をしている姿を見られても、いいのでしょうか。つて、今更ですね。先々週にご粗相されたときは下半身丸出しのまま拭いて差し上げたのですから）

おずおずとドアを開け、そつと入室。洋式便器に座ったままの樹里が手を伸ばしているのでロールを手渡す。樹里は足元までショーツを下ろし、ジャンパースカートの裾をお腹の前にまとめて座っていた。一生秘められるべき、無防備な姿。だが樹里は恥じらう素振りもなく、恥部を露出させていた。

「ありがと、かな」

「いえ……。では出ますので、ごゆっくり」

「うん。あっ」

「どうかありませんか？」

「うんちでそう。ん……でる」

むりむりっ ぽちゃん とぼん ぽちゃっ

小粒が控えめに落ちる音。羞恥の欠片もない報告に固まってしまっ

たかなは樹里のお尻から落ちていったうんちを見てしまった。

「ん、ふう。ちょっとだけどうんち出たよ」

「あ、はい、えっと、まずは失礼します」

（お嬢様が大便をするところを、見てしまいました……）

目の前で報告をする、一五歳。いや、一五ちゃい。

「もうお嬢様、少しは恥じらいを持ってくださいませ」

「別にかんななら恥ずかしいくないよ？」

「はあ。本当におこさますね」

「なんで怒るの？ うんち出たのに」

「なんででもです。そんなでは大人になれませんよ」

「樹里だつてうんちは恥ずかしいからかなにしか言わないもん！」

「ですが」

「樹里はかんなのこと大好きだから、全部見せられるよ。」

無条件の信頼がこぼゆい。同時に、心配にもなる。

「大好きでもお手洗いのときは隠しましょうね」

「別にいいのに。まだうんち出そうだからもう少しがんばるね」

「ええ、どうぞ。玄関で待っていますね」

（お手洗いに寄る時間は、なさそうですな）

便通があつたなら、トイレから出てくるのは間もなくだろう。かなが玄関に着いてから三分ほどして、樹里が降りてくる。

「お嬢様、すつきりしましたか？」

「んーん、あれからうんち全然出なかった」

「そうですか。まだ時間はありますよ」

「うん、いい。途中ででたくなったらちゃんとトイレ行くから、

学校行こ」

「おや。駅のお手洗いは汚いから嫌とわがままを言われていたのに、成長しましたね」

「だって四日もうんち出ないの久々だもん。学校でうんちしたくないから、しょうがなくなの！」

（はあ……自宅で大便を済ませたかったのですが。さて）

朝の忘れ物。自宅に置いて／出しておくべき荷物をお腹の中に抱えたまま、かんなは憂鬱な面持ちでお腹を擦った。

\* \* \*

陽射しの照りつける住宅街を、並んで歩く。

「今日も暑いね」

「そうですね。ですががんばって歩きましょう」

今までは父親の送迎で登校していたのだが、先週から二人は歩きと電車で通学をするようになった。運動不足のお嬢様を歩かせたり、駅の利用に慣らせるためである。きっかけは父親と喧嘩をして車通学を拒否したことなのは記憶に新しい。

普段は厚いタイツをおしゃれで履く樹里も、歩きになってからは蒸れるせいで薄手の黒ストッキングで代用している。真夏でもできるだけ露出はさせたくないらしい。

面倒くさがりの樹里は炎天下を歩くことに駄々をこねたものの、かな々と歩いて登校することは楽しらしく、雨の日以外はちゃんと歩くように頑張っている。数少ない娘との交流時間を失った幹臣

は早起きしなくなってしまったが。

自宅の屋敷から約一〇分。乗車駅に到着。複数の路線が通っている程度の駅だが環状線の乗降駅なのでそれなりに混雑はしていた。

「次の電車は二分後と七分後ですか。すぐに乗れますが、後でも問題ないですよ。お嬢様、お手洗いは大丈夫ですか」

自宅で済ませたばかりなので少々不適切な気遣い、ではない。かんなは通学中に樹里がそつとお腹を撫でていたのを見逃さなかった。

「樹里、うんちがしたくなってきた……。トイレ、行きたい」

「歩いている間に催されたなら今がチャンスですね。今のうちにすっきりして学校に行きましょうか」

「うんつ。鞆持ってて、うんちしてくる！」

（おや。今日はやけに素直にお手洗いにいきますね。いつもなら駅のお手洗いは汚いから、と渋るのに）

加えて『トイレの心配ばかり。子供扱いしないで！』とトイレに寄るのを嫌がるところを、機嫌よく小走りでトイレに向かった。尿意なら綺麗なトイレの学校まで我慢しようとし、便意でも二日目程度なら黙って我慢していた樹里だが、流石に四日目の便意を前にして耐える選択肢はなかったようだ。

（私も大便をしたいのですが、今は我慢です。これでお嬢様が大便を済ませてしまえば、降車駅で一人でお手洗いに入れます）

自宅での排便を失敗したかなだが、それでは終わらない。なら次は通学中にトイレに入ればいい。しかし通学は樹里と一緒に時間をかけてしまえば大便と思われるでしょう。

（降車駅のお手洗いは常に混雑していますからね。行列を理由にす



れば遅れてもごまかせるはずですよ」

トイレの前で樹里を待たせ、自分はトイレへ。しつかりと大便をして『並んでいて遅れました』と言えば万事解決。

(朝に家でしたのはずの小用をしたいと言つてもお嬢様なら疑問に思わずお手洗いに行かせてくれるはず。完璧ですね)

ほどなくして樹里が気持ちのいい笑顔でトイレから戻ってきた。

「待たせてごめんね」

「すつきりできましたか？」

「うんちいっぱいでした！」

満面の笑みで、おなかすつきりきもちいいの、お嬢様。

「それはよかったですが、公衆の面前ですから大声で言ったら恥ずかしいですよ」

「あ、そっか。樹里大人だから気をつけるね」

少し声のトーンを落としたが、すぐさまにきらきら顔でかんなをじっと見る。あまりにもあからさまな、褒められたいから聞いてねスマイル。こうも露骨に見せられては、かんなも無視はできない。

「お嬢様、何か良いことでもありましたか？」

「えっとね、驚かないでね、んふふ、実はね、樹里ね……しゃがむトイレで大きい方できたの！」

「私が促していないのに、それはえらいですね。それも小用ではなく大きい方とは。ちゃんとできましたか？」

「うん！汚さないで上手にトイレできた！」

これ見よがしに頭を差し出してきたので優しく撫でてあげる。

(撫でられてくしゃっと笑うお嬢様はかわいいですね)

褒められて嬉しい、褒めて嬉しい。

「座るトイレも空いてたけどね、挑戦したんだよ！ちゃんと一歩前に出て、はみ出さないでできたんだから」

樹里はしゃがむトイレつまり和式トイレが苦手で、仕方なく使うときはおしっこをはみ出させたり下着を汚したりと散々だった。極力避けていたが克服すべしと最近は余裕のあるときに挑戦している。

今日も勇気を出して数少ない和式トイレを選び、手すりを掴みながらだがちゃんと便器に収めて四日分のうんちをすることができた。

「ちゃんとお尻は拭けましたか？」

「子供じゃないから拭けたもん。でもやつぱりうんち、じゃなくて大きい方ときはウォシュレットないと気になるかも」

「しゃがんで大きい方ができるなんてお嬢様はすごいですね。では電車に乗りましょう」

「でしょー。えへへ」

(本当に、おこさまですね)

子供扱いをしたつもりだったが、おこさまお嬢様はかんなの言葉を受に受けて照れている。本当なら和式便器など初等部に入學する前に克服しておくべきことだが、洋式トイレのある環境に囲まれ甘やかされ育った樹里には縁遠い存在だったので、しょうがない。

(とにかく、これで私も次はすつきりできます)

学校最寄りの降車駅までは乗り換え込みで約二〇分。乗換駅でトイレに寄る時間はないので、後少し我慢すればお腹を軽くできる。

(大便を済ませないまま登校するのは本当に久しぶりですね。それも便意を抱えたままというのはなかったはずですよ。お嬢様のために

お手洗いの場所や空いている所を覚えたことが、自分のために役立つとは思っても寄らないものです」

かんなの理想はある程度混んではいるものの、登校に支障を来さないトイレ。降車駅の構内にいくつかあるトイレで問題なくうんちができる場所をもう選定し終えていた。

走る箱に詰め込まれた乗客の波とお腹の大波に耐えながら、樹里の他愛ない雑談にそっけなくならないよう気を遣いながら。二人は無事に降車駅に降り立った。

改札を抜け、目的のトイレの前まで来た。普段ならば通り過ぎるし樹里が催していてももっと空いている穴場に案内するが、今日は並んでいる方が都合いい。

「あの、お嬢様。あの、によ、尿意を。催してしましまして……お手洗いに寄ってもいいでしょうか？」

（ちよっとだけ恥ずかしかったですが、ちゃんと伝えました）

実は尿意の告白も少し恥ずかしいメイドちゃん。限界まで我慢することはないものの、言い出すのに少し時間がかかることが多い。

「かんなはおしっこ？　じゃあ一緒にトイレ行こ」

「では行つてきますね。少しお待ちください」

かんなは掛け合いがすれ違っていたのも気にせず、誰が見ても気づかないレベルで頬をゆるませながら女子トイレの中へ。

「いっぱい並んでるね」

「そうですね。……？」

振り返る。最後尾のはずのかんなの後ろに、樹里がいた。

「お嬢様、どうしてこちらに？」

「一緒に行こつて言ったじゃん。樹里もトイレしたいの」

「ええと、おしっこですか？」

「うんち。」

あつけらかと答える少女は片手をお腹の上に添えていた。

「さっきいっぱいしたのに、またうんちしたくなってきた」

片手をお腹にあてがい、困り顔で擦る樹里。計算外。予想外。想定外。完璧メイドちゃんのブランニングに亀裂が生じる。

「お腹の調子でも悪くなりましたか？」

「うん、でも柔らかいの出そうかも」

「我慢は、しないんですね」

「ちよつと我慢できなさそうだから、ちゃんとする」

（一人でゆつくりできると思つたのですが、まさかお嬢様のお便秘がこんな形で悪影響を及ぼしてくるとは）

「かんないつもうんち我慢したらだめって言うし」

「それもそうでしたね」

列が進み、二人も進む。このトイレは個室が多いもののその分寄る人も少なくなく、一〇人程度の列が形成されていた。

（しかしお嬢様も大便をされるなら、問題ないです。ゆるめなら出し切るまで時間がかかるでしょうから、その間に私も済ませればいいのです）

後ろにいる樹里にわからないようにお尻を内側に締め付ける。高潮、外に出る寸前で押し留められた大便の起こす便意は並々ならぬもので、直腸は絶えずかんなに排便の要請を送り続けている。具合が悪いときの便意に比べれば優しいものだが油断はならない。

（大丈夫です、この便意ならひと踏ん張りで出し切れるはずですよ。少し便意が残ってもお腹を壊しているわけではないですし、一日我慢できるはずですよ）

「トイレ、まだかなあ。ちよつとお腹痛くなってきた」

「がんばってくださいお嬢様」

「だいじょうぶ。樹里大人だからうち我慢できるもん」

そうして数分、かんなが列の最前となり間もなく個室が空いた。

（我慢しているお嬢様に譲るべきですが、お嬢様より早く大便をするために今日だけは先に行かせてもらいましょう）

「では先に行きますね」

「うん。時間かかりそうだから、外で樹里のこと待っててね」

「まだ時間に余裕はありますから、ごゆっくりどうぞ」

「じゃあ今度こそすつきりしよーつと」

むずむず太もをすり合わせる樹里に見送られ、空いた洋式便器の個室へ。催してから実に一時間近く、ようやく樹里から離れてトイレに辿り着いた。鞆をフックにかけ、いそいそとスカートの裾に両手を差し込む。

（やっつと、やっつと落ちていて大便ができます）

白いショーツを膝まで下ろし、スカートを捲くり上げながら着座。

排泄腔は既に盛り上がっており、排便の準備は万端。

みちみちみち……

（息んでもないのに大便がもう出そう……！）

出すべき場所で心が緩み、お尻がゆるもうとした、その時だった。ばたん、がちやつ

「うーうんち出ちゃう」

ぐぐ、つ きゅつ！

外気に触れかけた便の頭が括約筋の圧力でお腹に引っ込んだ。どんな人混みの中でも聞き分けられる自負のある、愛おしい声が呆けていたかんなに冷や水を浴びせた。どうやらかんなのいる個室の隣に、樹里が入ったらしい。

（そんな、隣の個室に、お嬢様がっ!?）

みちち……

（だ、大便が、出ちゃ、あつ、うっ——！）

排便姿勢と高潮した便意が合わさって強烈な圧力が肛門に襲いかかる。絶対にお嬢様には見せたくないであろう形相で歯を食いしばり、必死に大便を直腸に押し留める。

（お嬢様は隣に私がいるとわかつているはず、ここで音を立てたら、万が一臭いでも隣に漏れたら、私が大便をしていると思われる……！）  
何の根拠もなしに離れた個室に入れると思っていたかんなに痛恨のミス。半開きの肛門は黄土色の汚物を啞え込んでいて、直下の水面に照準を定めているというのに。

（ああ……っ！ 大便が出そう……ッ！）

一方で樹里は壁一枚隣にかなががいることを気にもせず、

「んっ！ うーん!!」

にちにちにちにちぶりぶりっ！ にちちちちっ！

（あああ……うんち出たあ……！）

気持ちよさそうに音を立てて細いうんちを解き放っていた。

（お嬢様の大便の音が聞こえる……私も今大便をしたら、お嬢様に

聞かれてしまう、恥ずかしい、大便が恥ずかしい……!!)

大便がしたい。したくない。大便をしたい。したいけど。

(水を流しながら出して音消しと臭い消しをでも流水音の大きい内に出し切れなかったら消音機がありますがかき消せなかったら尿意と言ったのに何度も水を流せば怪しまれますしうう大便がしたい出そう出る、だめ……!!)

便座の上で逡巡して数秒。かななは柔らかな小尻の形が変わるほど強く引き締めながら内股で立ち上がる。

(大便が、したい、つ。したい、ですが、お嬢様の隣で、恥ずかしい、無理、大便、我慢しなきゃ、出ないで、くださいっ)

よちよちと壁によりかかり、全体重を壁に押し付けてお尻を締めめる。トイレの中にいながら排泄欲を抑えようとする、女の子。

(はぁ、はぁ。やつと便意が収まった……)

落ち着いた内に下着を穿き上げ、フリで水を流す。

(私もいっぱい大便をしたい。お嬢様のように、気兼ねなく、大便を……お手洗いにいるのに、恥ずかしい)

「んっつ、んっ、ん……うーんっ、はあっ」

にちにち ぶりぶり ぶりゅ ゆるゆるゆる……ぼちゃっ

柔らかめで途切れ途切れの排泄音。少量でもかななに聞こえているのだから、太めで一日分の健康便を出せば言うまでもない。

(並んでましたし入り直すのも無理でしょう。しかし我慢できたので、お手洗いから出るしかありません)

念のため紙でお尻を拭くと僅かに黄土色が付着していた。しっかりと清めてから個室を出て手を洗い、トイレの入り口に佇む。鬼気迫

る便意はなくなったものの、意識の隅っこで排便欲が静かに主張をしている。朝に催してからは波のようにしたくなくなったり、したくなくなったりだったものが、今は常に便意がある。無視できるが、再度催す予感があった。

数分してトイレから出てきた樹里は、綻び顔。

「はぁ、今度こそすっきりした！ ちよつと柔らかかったけど、いっぱい出たよ」

「学校に着く前にすっきりできてよかったですね」

つい数刻前に隣のトイレでかななが孤独な戦いをしていたとは知るはずもなく。半歩早いリズムで駅を歩いていく樹里に対し、かななはと言えばお腹の重しのせいでやや足取りが重い。

(仕方ありません、一日排便を我慢しましょう。お腹を下しているわけではありませんし、一日分の普通の便くらい翌朝まで……。いざとなれば学校ですればいいだけです)

「明日は土曜日でお休みだし楽しみ」

「まだ一日が始まったばかりですよ」

まるで自分にも言い聞かせるような、返答だった。

(どうか一日大便が我慢、できますように)

駅の外は相変わらずの晴天。少しだけ角度を変えて降り注ぐ橙色が、少し青い顔の自称使用人を容赦なく照りつけていた。

## 朝の秘め事、君の傷痕

とん

足音が、朝のこのときばかりはやかましく聞こえる。

タイルを踏む。右足、左足。続いて、右足、左足。

「誰もいないみたいだね」

通学路を一本逸れた所にある公園は、もう少し遅く来たなら子供の遊び場であり、もう少し早く来たなら犬と飼い主がのどかに散歩でもしていることだろう。

けれど、今は私たちだけだった。広場、遊具、ベンチ——敷地の中に建てられた公衆トイレの中。どこにも人影は見当たらない。

手を握る。汗ばむ皮膚伝いに、仄かに高い体温が伝わってくる。

「行こっか」

あるいは、緊張が体を敏感にさせているのかもしれない。私たちを目撃するのは電柱に止まった雀が精々だというのに、どこに何か潜んでいるような気がしてならない。鞆の肩紐をかけ直す。

空いている方の手を伸ばし、個室のドアを開ける。こちら側と同じ色のタイルが続いた先に、椅子の形をした白い陶器が設置されている。洋式の便器。ぽっかりと開いた穴。配管からせり出すように金属のレバーが伸びていて、同じ材質のペーパーホルダーが壁面に取り付けられている構図は、公共の施設特有のものだ。ここが、家の外であると改めて認識する。

少し前に工事がされたお陰だろう、染み付いた臭いは感じない。

清掃もきちんと行われているようで、公衆トイレとしてはかなりきれいな部類だと思う。

右と左を一瞥、一呼吸おいて、人の気配が無いのをもう一度確かめる。中に入ってしまったえばもう関係ないといえそうなのだれど。

一人の為に作られた空間。踏み入れると、私は半身になって腕を引いた。

「ほら、おいで」

「……うん」

おずおず、中の様子を伺うようにしながら陽奈が私の後に続いた。

普段はもっぱら私が手を引かれ振り回される側だけれど、この時はかりは逆になる。

背の高い陽奈を、私はいつも見上げている。見下ろす彼女の瞳は、いつもは快活な輝きを灯している。けれど、ここでは。

手招きを残り数十センチ分。握り手を解くと、放たれた陽奈の腕がスカートの内側へと滑り込む。二人分の息遣いの間を微かな布擦れの音が掠めた。水色に紺のストライプは陽奈のお気に入り。

「寝坊、今日はしなかったね」

スカートをめくり腰掛けた所で、陽奈は小さく頷いた。頬に赤みが差している。質問ではなく、確認とも少し違う、確信をもった、ちよっと意地の悪い事実の反芻だった。薄い唇を内側に揉み込む陽奈も、私の意味する所を理解していた。

「うん……だから」

そのまま、目線を逸したまま、陽奈が手を伸ばす。私も手を伸ばして、触れるか触れないかの距離でしばし彷徨わせて、再び二人を

繋ぎ合わせる。手の重ね方は、陽奈を見下ろす前とは逆。

「汗、掻いてる」

「テルも」

あー、とわざわざらしく間延びした声を発してみる。

「ほんと、今日も暑つついね……アイス食べたい。帰り、一緒に行かない？」

「え、つと……うん、良いね。大通りの新しいお店とか、どう？」

「あー、あそこ行ってみよう……でも、結構な寄り道だから行き帰りで暑くなっちゃうかなあ」

私が首を傾げると、くすり、陽奈が笑う。

「それはまあ、いっぱい食べて打ち消そうってコトで」

「どういう計算……」

燦々と輝く夏の太陽は早々と空に登り、朝方とはいえ既に蒸し暑い。わざわざ狭く仕切られた空間に居れば尚の事、冗談めいたやり取りを交わす間にも、くつつけた手のひらの内側は、私のも陽奈のも、じつとりと湿っていた。

しばしの沈黙の後、陽奈の指先が私の手の甲を撫でたので、会話はそこで終わる。

無言。

甘くもたれかかるかのような握力を一回り強く包む。きゅつ、と。

「すうー、はあっ」

大げさな息遣いをしてみせた。一拍、互いの温もりが伝わり合っている。二拍、陽奈の息遣いが鼓膜をくすぐる。三拍、四拍、ゆつくりと、私も息を吐く。五拍。さつきまでと同じような笑みを作る

と、目の前の友人は少しだけ唇を尖らせた。いじらしい、表情。

陽奈も息を吸って、吐いて、それから言った。

「する、ね」

握る私の手は陽奈よりも一回り小さい。更に包むように、陽奈の手が私を握った。心臓が、自身が掴まれたかのように脈動する。私が「いいよ」と答える。始まりの合図だった。

喉元が小さく震えた。こみ上げる——「ん、っ」声。

押し出されて溢れる吐息が一つ。繋いだ指先から、そこから更に繋がりを伸ばした腕の、肩の、陽奈の体の震えが伝わってくる。縮こまった、爪の先が優しく食い込んだ。目の前の表情に浮かぶ緊張は、体の、心のそれだった。

「爪、切ったんだ」私が言うと、ん、と眼の前の顔がほんのりと赤く染まって答える。

伝播する震えがある時、ぶるりと一際が強まりを見せた。陽奈の鼻から空気の塊が押し出され、うめき声が漏れる。

始まる。

「今日も、いっぱい出そうね」

始まる。

始まる。私達の秘め事が。体に隠され、扉に隠され、両足と便器に蓋をされて、秘されに秘された陽奈の秘め事が。私の目の前で、始まる——。

「ん、ん……」

——みちつ。

「ん、っ」

うんちが、始まる。

「つ……ふっ」

鋭敏になった感覚を、粘っこい音が掠める。遠く聞こえる鳥のさえずりにさえ紛れてしまいそうな。微かで、些細な音。

陽奈の息みは、水滴のように少しずつ溜まって強まっていく。思い切り息めばすぐにでも終わるだろうに、ガスの大きな音をトイレ中に響かせた時以来、「恥ずかしいからヤダ」と陽奈は最低限の力だけを排泄に注ぐようになった。息を押し殺し、

「つ、ふ……う……」

爆発の予兆を感じてか、こうやってせつかく籠めた力を抜いてしまふのもしばしば。本当に、少しずつ。陽奈の腸内に溜まったものは静かに秘めやかに。

間を置き、再度、陽奈の体が震えを帯びた。鼻先が触れ合うかどうか、頬の強張りの微弱な変化すら見逃さないほどの距離。きゅつと寄せた眉間の皺の一本一本まで余すところなく目線でなぞれる。

陽奈が息を吸う。鼻が膨らむ。喉元が小さく上下し、胸で空気をつかえさせる。それが下へ伝わって、制服の内側で腹圧になる。その先の太ももの裏側も、甘く引つかれる手のひらから伝わる。それら圧力は更に下へ、お尻の二つの丸みの中心で押し出す力に変わっていく。いよいよだった。

「んん」

ぐっ、きゅうう。手が閉じる。お尻の下で、小さな孔蕾が花開く――

「んんっ」――開いた。

にちり、にちにち。

蛇。大きな蛇がひび割れた体表を這わせ、仄暗い穴の奥から外を指していた。瞳に入り込む光よりも鮮やかに、そんな光景が私の頭の中に描かれた。私は膝の間に丸められた下着を突き抜け、両腿の隙間を這い抜け、水底から、ぼっかり開いた暗闇を見上げていた。

陽奈の、お尻の穴。陽奈の息遣いに合わせ、それ自体も一つの生き物であるかのように収縮する。出、るっ。

「ふ、ん、んっ」

にち、にち、と音が連なるようになると、暗闇が中心から茶色く、蛇の頭を覗かせた。唇を揉み合わせる陽奈の合図は、私の脳内の光景と狂いなく。

「っ」

にち、にち、にちにちにちっ……。

腰掛けた白い陶器の内側で、静かな音と共に、ゆっくりと穴底を指していく。お尻の穴から押し出される茶色い塊。昨日も、一昨日も出していた。それでいて今日もまたしっかりと出すべきものを出すのだから、陽奈の消化器官はすこぶる健康的らしい。

「いっばい出るね」

「言わなくて、いいっ」

てれくさい時に出す声だった。腹圧の高まりとは別の赤みで、眼前の頬が塗り直される。この娘がこうも恥ずかしがるのは貴重だ。他の機会はそうそうないだろう。……悪いとも思いつつ、つい。

「で、るっ」

ぽちゃん。声から一瞬だけ間を置き、水溜りが音を立てた。素朴な、包み隠さない音だった。出た——しかし、まだ終わりではない。

みち、みちちみちみち……

音の途切れを埋めるかのように、勢いついた排泄だった。きつと少しだけ固さの柔らかくなったものが、開きめくれたお尻の穴を通して抜けている。便器の水面がぼとぼと音を立てて跳ねた。

どこまでも現実的なその行為は、けれどいつも、どこか信じがたいと思うのだった。排泄は誰だっける。おしっこも、うんちも。それは人としてごく当たり前で、いくら秘されても変わらない自然の摂理。私自身、一日に何度もトイレに行く。陽奈も同じで、隣あった個室で用を足した事だってある。なのに、こうして目の前の友人の下半身を目の当たりにすると、どこか信じられずにいる自分がいる。陽奈の、うんち。

「まだ、出そうだね」  
いちばん太い所はお尻を通り抜け、もう流れるままなのだろう。

「……ん」と、目を逸した陽奈が喉を鳴らす。

「つふ、んん」

唇が尖り、絞り出される声。体の下半分でも同じことが。

そのまま、細い、あるいは小さい便が何本か、とぎれとぎれに便器の穴底に落下した。

陽奈は口を閉ざしたまま、鼻で息をした。

「……出た」

「全部出た？」

「……うん」

どこか艶のある表情で、陽奈が私を見つめる。数分ぶりに再び見つめ合う顔は、いつも同じような肌の色をしていて、唇はきまって拗ねたような形をしていた。汗の伝う道筋は、日によって僅かに違う。生え際、今日は右の眉端、頬、顎先。

「すつきりしたね」

私は陽奈の頭に手を伸ばすと、やさしく撫でた。

「ちょ、つ……は、恥ずかしいって」

嫌がる素振りを見せる陽奈だけれど、それが本気で無いことは最初から理解していた。

もう、ある程度の塩梅は理解しているのだ。全くの無関心とは、それはそれで無心であり、つまりどうせ逃れようの無い羞恥心なのだから適度に揶揄られるのが落とし所なのである。

紙を巻き取った。金属がカラカラと音を立てる。渡す。陽奈は無言で受け取った。

目の前で僅かにお尻が持ち上ると、その隙間に紙が差し込まれる。前後に動く腕、その陰では元のすばまりになったお尻の穴が擦られて、真っ白い紙が茶色くなっていく。ウオッシュレットの付いた個室だけれど、陽奈は尻たぶが冷たく濡れる感覚があまり好きではないらしかった。

ひとしきり綺麗にし終えて、陽奈が立ち上がる。

私は彼女の胴に手を回して後ろを覗き込んだ。——水面いつぱいの、茶色。下層、太く身の詰まっていそうな便が一本、うねりながら。積み重なって、細い便は途中で切れながら出たらしい。そして、濡れて半透明になった紙が、ピリオドを打つように小さく丸めて載



せられていた。

「いっぱい出たね」

「……テルの、いじわる」

視線の上下が元通りになり、個室を出た。

「アイス、奢りね」

「ええ〜？」

早歩きで陽奈に続き、通学路へと戻っていく。

「……まあ、冗談。むしろ、その……いつも、ありがと」

「ううん。こんなので陽奈の役に立てるなら、喜んで」

春が過ぎ、やってきた夏も終わりの兆しを見せる時分。

私が陽奈を見守り、彼女は見守られながら大きい方をする。殆ど毎日行われるそれはまさしく、私と彼女の『朝の日課』であった。



かけがえのない友が居るとして、永遠を誓う人が居るとして、ロマンチックな物語を経てそうなったかと言えそうではないし、ドラスティックと形容するに相応しい出会い方とも限らない。むしろ逆で、ありふれた出会いの中にこそそうして物があるのかも？

なんて問答は、まあ、特に意味は無いのだけれど。

少なくとも私と陽奈の出会いについては、ごくごくありふれたものだった。入学式での出会い、自己紹介で聞いた名をたどしく呼び、友人になろうという誓いを交わし合う。

軽快に右手を上げる陽奈の格好は、その時からずっと彼女のお決

まり。一つ変わったのは、三年ぶりに見たそれは、少し見上げねばならなくなっていた事か。

「あつっーい、あつっーい」

「何でそんなに楽しそうなのさ」

纏わりつく湿っぽい不快感を、何故か軽快な鼻歌に乗せて口ずさ

む彼女は陽奈—— 籙木 陽奈。名字、久しぶりに思い出したなあ。

丸い瞳、弧を描きながらも力強さを感じさせる唇。少し茶色みがかった髪の毛は最後に見たときより長くなって、迷いなく引かれた曲線のような流れが肩下に切り揃えられている。整った鼻筋に姿勢の良い背筋と合わせて、例えるのなら夏の花。

元氣瀉刺、明朗快活。男子に混じって騒いでいるのもしばしば、少し茶色みがかった髪の毛いつも楽しげに笑い周囲を、私を明るくしてくれる人。そして、私にとって親友と言いつつも表せるただ一人。それが私から見た、陽奈という少女だった。

「あつっーい！」

溜めて、跳ねるように叫ぶ。体は本当に跳ねた。がばり。

「何で私に抱きつくのっ」

「今日も抱き心地が良いねえ、テルさんやい」

「暑いってのお」

じゃれつく陽奈、振りほどく私。テルというのは渾名だった。照子を縮めて照、読み替えて『テル』である。こう呼ぶのは陽奈だけで、全く違和感こそ感じないものの、こうしたやり取りは実は三年ぶりだったりする。

「このサイズ感が堪らないのよ」

「陽奈がおつきくなりすぎなの。いったい何食べたらそうなるのさ」  
引つ越したのは三年前、両親の仕事の都合で、別の県まではるばると。それから今年の春に再びこちらに来るまでの間、私たちは一度も直接会えなかった。だから、久しぶりに会った時には、彼女を見上げて驚いたものだ。

「肉」

即答である。

「小学生か」

記憶にある陽奈は、クラスの中でも小さい方から数えた方が早かった。そんな彼女は、三年の間にすっかり様変わりしていたのである。何とということでしょう。私をとくに追い越し、スタイルの良さを羨ましがられる程になっていて。離れてからもメールや電話でやり取りを続けていたけれど、流石に三年という年月を感じたものだ。  
「小学生なのはテルの体じゃないの？ 昔と全然変わってないように見えるなあ」

「しばくわよ」

まあ、合わせて中身の方まで急激に大人びていたなんて事が無かったのは、幸いだったかもしれない。……むしろ、変わっていて欲しかった？

大体、こっちに帰って来る事すら言わないなんて。本人曰く「さぶらーいず！」だそうだけだ。

春休みの登校日、居るはずのない制服姿に困惑する私を見る陽奈の表情ったら、それはもう可笑しくて堪らないといった様子だった。その日はとりあえず、頭頂部目掛けて手刀を振り下ろしておいたけ

れど。

——ていつ。

「ほわっ、暴力反対！」

あと何百回か繰り返せば、この身長差も埋まるのだろうか？

「カリカリしちゃうんだから。牛乳飲んだ方がいいんじゃない？」

「大人な陽奈さんが奢ってくれるって？」

「聞こえない」

「……まったく」

冗談っぽく陽奈が笑う。わざとらしいため息、私の頬も自然と綻ぶのを感じた。数年ぶりの再会は、けれど科学の進歩した現代においては決して強い隔たりを生じさせるものではなかった。

「陽奈みたいになれば、身長伸びるのかなあ」

「私みたいにつて？」

距離があらうと、私達は互いをよく知ったままでいられたのだ。

そう、思っていた。

「うん。授業時間と睡眠時間の区別を無くす、とか」

「……寝る子は育つ、つて言うじゃん？」

「その身長は成績に回すべきだったね」

投げた棘とそれが刺さって苦い表情をする陽奈はさておき。

唐突だけれど、三年の間に変わった事はもう一つあった。正確に

言えば、『変わったと思ひ込んでいたこと』が。

「人間、苦手を克服するより得意を伸ばす方が良いらしいよ？」  
それは——『陽奈はどうにも朝に弱い子だったらしい』という、

再会当時の私の認識。

家から学校へ向かう方向が同じというのもある、四月以来私と陽奈はずっと一緒に登校している。待ち合わせ場所は三丁目の曲がり角。とりとめの無い話に花咲かせながら歩く。特別刺激的とは言いがたいけれど、ついこの間まで出来なかったせいか、横を向いて歩くと足が少しだけ軽く感じる。長くなった通学路も気にならなくなった。その待ち合わせに、彼女はよく寝坊をしてきた。

いや、むしろ、ごくたまに早起きできる日があったと言った方が正しいかも。待ち合わせ場所に来るのはいつも私が先で、彼女が数分遅れて現れるもしばしば。まあ、待ち合わせ時間には余裕を持たせていたので特に問題にはならなかったが、それでも少し心配になったものだ。

というのも、昔は違っていたはずだったからだ。記憶にある陽奈は、むしろ朝から元氣いっぱいで、理由も無く走りだすような娘だった。いや、走りだすのは今も同じである。実際、頬を掻きながら遅刻してきた所で、彼女が大人しく歩くのは最初の二、三分だけで、訳もなく競争をしたのも一度や二度ではない。彼女と歩く道はいつも賑やかだった。

そんなだから、授業中の居眠りもひよつとすると何かの事情で彼女が寝不足である証なのかもしれないなんて疑ったりもした。でも、彼女が余裕を持って現れるかどうかは学校での彼女とは無関係らしく、シャープペンシルを持つ手よりも船を漕ぐ首の方が動いているのは『寝坊』のなくなった今でも変わらない光景だ。

寝起きだけが余程悪いのかと尋ねた事もあったが、彼女はいつも上手いことはぐらかして答えなかった。

「そーいえばさー」

「んー？」

そんな陽奈の秘密を知ったのは、再び同じ校舎へ通うようになって三ヶ月余りが過ぎた頃。春と夏の境目、湿気と雨雲が文字通り陰湿な雰囲気漂わせる時分。いつものように過ごすつもりでいたある日。

半袖姿の同級生が徐々に増え始める頃になると、私の口から吐き出されるため息の数も増える。湿気に纏まりの悪くなった髪の毛を撫で付けたのを覚えている。

その日こそが、その認識が間違いだつたと、陽奈の『寝坊』が何のために費やされた時間だったのかを知った日だった。

『——はあっ……はあっ……ご、ごめんテルっ！』

まだ何も知らずに居た朝、私がいつもの待ち合わせ場所ですわっていると、陽奈が慌てた様子で駆けしてきた。十分の遅れ……彼女が初めて、本当の意味での寝坊をしたのだつた。



いつも通りと思い、けれどいつもと違った日。

私の視点だけで言えば、朝の平穏は別段いつもと違いはなかった。陽奈が遅れるのは珍しくもない。傘を差しながら器用に両手を合わ

せる彼女を私がじとりと見つめ、それもすぐに終了。遅刻はしないし特別真面目を気取る気など私にはない。楽しいことを考えていたというののは私も陽奈も共通しているから、鬱陶しい降雨に文句をつけながら、私は前日に読んだ本の話をして、陽奈は家族の笑い話を登校のお供にした。

日中は湿った靴下の感覚に不快感を覚えながら授業。陽奈は船漕ぎ、後にお説教。そして放課後になると、ガラスの向こうの傍観者という訳にもいなくなつて、また傘の持ち手を握る時間に。

その日、本当なら私は一人で帰るはずだった。というのも、所属している図書局の当番が当たっている目で、私は図書室の受付をやるはずだったのだ。

けれど、ちょうど図書室に行こうとしたところで別の局員に頼まれて担当日を入れ替えたのだった。

「陽奈あーっ！」

居残りをする理由もなくなつて帰路につく。もしかすると先に帰つた陽奈に追いつけるかもしれないと早足で進むと、ほどなくして所でその後ろ姿は見つかった。

「あれ——テル？」

気づいた陽奈が振り返る。首を傾げながら呼ばれて、私は彼女の元へと駆け寄った。

あるいは曇天に紛れていただけで、このときの陽奈はもう優れない顔色をしていたのかもしれない。遠くてよく分からなかっただけ

で、呼びかけに答える声の澁刺さは揺らいでいたのかもしれない。記憶を辿つてこそ思えることなのかもしれないが。

ただ、もしそうだったとして、彼女の機敏を感じ取るにはいささか距離が離れていた。そして、鞆と傘を揺らして私が駆け寄る合間に、彼女の『それ』は一旦は陰に仕舞われ、私は気づかなかつた。

この時にはもう、彼女はトイレに行きたくて堪らなかつたのだと。

「あれ、図書局じゃなかつた？ 当番だから一緒に帰れない、つて」

「代わつて欲しいって言われて」

「そっか……えと、じゃ、帰ろっか」

肩を並べた帰り道。

雨の日は陽奈が遠く感じられた。傘を差す分の距離がそう思わせているのだろうか。半透明のビニールと折りたたみ傘の水色が領域の境界線だ。僅かばかり近づいたり遠ざかつたりしながら歩道を行く。ふと感じたのは、そのさなかだった。

「ねえ、なんか今日、用事とかある？」

心なしか陽奈の足並みが普段よりも幾分か急ぎ足であると、学校最寄り駅の駅舎が見えた頃だった。

朝の日課を私にさせて

軟球こるふ

体がピクツと動く。

朝だ、部屋の明るさで分かる。私は腕を伸ばす。

「う、うーん」

そしてそのまま鳴る直前の目覚ましを止める。

すぐに布団から出て、カーテンを開ける。

ほんのりカーテン越しに入っていた日差しが部屋を埋める。今日もいい天気。実に良い事だ。暖かな光を思い切り浴び、もう一度大きく腕を天高く伸ばす。

朝の目覚めが悪くて起きれない、なんてことは全くない。友達はい皆、朝布団から出られないと言ってるけど、私は毎日ちゃんと起きることが出来る。いつから出来るようになったのかは分からない。

“習慣”というやつだろうか。

部屋から出て真つすぐトイレへと入る。まだ私だけなのか、それともこれから起きるのか家は静かなものだ。でも一応鍵を閉める。家族間とは言え、これも一つのマナーだ。

朝一のおしっこをしているとコン、コン、とドアが叩かれる。

「はいってまーす」

ノックに言葉で返す。

「はい、待ってまーす」

その声はお母さんか。本当は朝が苦手だったらしいけど、私に合わせるうちに早起きが嫌でも出来るようになったみたい。

しっかりと拭いて水を流す。ドアを開けると眠そうな顔のお母さんが立っている。

「ついでに、お父さん起こしといて」

お母さんはトイレに入りながら私に頼んでくる。

「はいはい」

両親の寝室、先に起きたお母さんのベッドは空いている。もう一つのベッドはまだこんもりと膨らんでいる。

「お父さん、あさー、起きてー」

膨らみを揺さぶると抗議のうめき声が聞こえる。

「お母さんに怒られるよ？ほら起きた起きた」

さつきより強く揺らすと目も開いていないお父さんが顔を出す。

それを確認すると私はさつきと部屋から出る。あの状態なら時間はかかるけどちゃんと起きてくる。リビングに行くのと、いつの間にか着替えたお母さんが朝食を作る準備をしていた。

「アナタも着替えてきなさい。出来たら呼ぶから」

お母さんの言う通り自分の部屋へと戻る。パジャマを脱いで、シャツを着てその上にジャージを着て行く。

「制服に着替え直すのめんどくさいから一日中ジャージでいいんだけどなあ」

誰に言うわけでもない文句をぶつぶつとこぼす。

制服を畳んでスポーツバックの中へ。大会が近くなったら競技用の服に着替えて練習したりするから、これもまためんどくさい。

まあ大会に選手として出れることは喜ぶべきことなだけだ。そんなことを考えながらリビングに戻ると、お母さんがせつせと朝食

を用意しているので食器を出して手伝う。ご飯も並んで食べるだけという時にやっとお父さんが来る。

「ふあゝ、おはよお」

欠伸まじりのまだまだ眠り足りないと言わんばかりの顔。家族で一番寝起きが悪いのがお父さんだったりする。

「そもそも俺は別にまだ時間余裕あるんだけど」

椅子に座りながら、この早起きに文句を言い出す。

「皆で食べた方が片付けとか楽なの、協力して」

お母さんにすぐさま言い返され、お父さんは無言で負ける。皆が揃ったのでいただきますと言ってから食べ始める。私は早く学校に行きたいけれど、急いで食べると怒られるから焦らずそれでいてなるべく早めに食べる。

食べ終わっても両親はまだ途中だ。

「食べるのも早いなあお前は」

「ちゃんと囓るの？」

これでもだいぶ速さを抑えているのに、それでも言われてしまう。

「もお、ちゃんと食べてるよ！」

食べ終えた食器を運びながら抗議する。手早く洗い、朝の日課であるもう一つをしに動く。向かう先は起きてすぐに入ったトイレ。これをしたかどうか落ち着かないから。

この流れ、いつ頃から出来たのか分からない。同じような時間に行っているからなのか、食べた後で内臓が動き出すからなのか、原因は分からないけれどとにかく私は朝必ず排便している。

下着を下げ、座ってから少し待つだけでもう出口にまで下がって

いく。力む必要もなく流れるソレを感じながら今日も何も問題ないなど考える。

出口から先にガスの方がぶつ、ぷうつと出る。やがて頭を出すと一気にトイレの中に出て行く。

ムリユムリユムリユ、ポチャン。

ふう、と一息つく。

全部出たなど実感してから、念入りにお尻を拭き、流す前にチラと出たものを見る。色も固さもやっぱり問題ない。

今日も私は健康だ。

うんうん、と納得しながらやつと水を流す。トイレから出て鼻歌でも歌いながら自室に戻り、学校鞆と部活用のスポーツバックを手取る。部屋から出るとお母さんが立っていた。

「はい、お弁当」

催促するまでもなく作ってくれている。

「私に早い早いって言うけれど、お母さんもいろいろ早いよね」

いつの間にか作っていたのか分からないお弁当を受け取りながら言うとお母さんは笑いながら

「ま、アナタの母ですから。負けませんよ」

なんて言ってくる。その言葉を聞いて私も

「でも、おトイレの時間は私より遅くないですか？ 今日で何日目？」とイジワルな質問をしてしまう。

すると少し顔を赤くしたお母さんは

「う、うるさいっ、ほら早く行きなさい」

と私のお尻を軽く叩いて急かしてくる。

「きゃっ、まだまだ大丈夫だってば、アハハ。ごめんなさい！」  
謝りながら靴を履いて元気よく家を出る。

「いつてきまーす！」

軽くジョギングしながら学校へと向かう。あまり早く走ると鞆が揺れてなんだか走りづらいからこのくらいの早さがちょうどいいのだ。無心で走っていると横から声がかかる。

「おはー、タネっちは今日も元気だねえ」

「おはよお、ハナちゃんだつて変わらないじゃない」

同じクラス、同じ部活に通う私の友達。タネっちは私の愛称なのだが、別に苗字や名前に種なんて付いていない。苗字と名前の頭を取った愛称らしい。

そんな呼び方をするのは彼女だけなので、私もハナちゃんと頭を取った呼び方をしている。一番仲の良い友達と並んで走って登校する。これもまた1日の始まりを感じて楽しい。

昨日のテレビ番組やもうすぐ来るテストの話なんかをしていたらあつという間に学校に着く。さっそく更衣室に入つて鞆をロッカーに起き、着替えようとすると

「あー、ちょっと先着替えてて、私トイレ」

ハナちゃんはそそくさと出て行ってしまう。一人きりで少し寂しい更衣室で仕方なくジャージに着替える。

「よくあんな所使えるなあ……」

友達が向かった先であろうトイレを想像する。

グラウンドの近くには運動部用のトイレが設置されている。しかし、古いし汚いしであまり使おうとする人は少ない。なんだかお化

けが出るなんて噂まであるし。一度だけ興味本位で入ってみたことがある。

昼間でもやけに薄暗く、壁やドアにはたくさんイタズラ書き、トイレ自体も掃除はちゃんとしているのかと怒りたくなるくらい汚い。私は身震いと共にすぐにそこを出た。

着替えた私は、グラウンドに出て一人ストレッチを始める。他の部員も徐々に集まり始め、顧問の先生も来たくらいでようやく友達に戻ってきた。

「えらく難産だったようでハナさんや」

私は御婆さんのような声で茶化すと

「いやあ大きな子でねえ、大変でしたよお」

とふざけて返してくれる。

私が笑っていると

「タネっちは便秘しないの？ 前に聞いた時たしかいつも家でしてくるなんて言ってたけど」

とハナちゃんが聞いてきた。

「私？ 便秘なんてしたことないなあ。毎日ちゃんと出るよ。便秘ってそんな辛いのか？ 分かんないや」

と真面目に答えたのにハナちゃんはボカボカ叩いてきた。

お母さんもそうだけど、出づらい女性にそういうのはタブーらしい。あれだ、太ってる人の前で太らない体質自慢をするようなものなのだろう。朝に自然に出るから秘訣なんて聞かれても答えられないなあ。

皆が集まったところで朝の練習が始まる。ストレッチ後にグラウ

ンドを3周くらい走り、その後は短距離と長距離に分かれて練習する。私とハナちゃんは短距離だ。

走る人とゴール地点でタイムを計測する人で別れ、交代しながら練習していく。私が走る側からスタートする。構えから解き放たれ、線だけ引かれた簡素なその場所へと走っているこの瞬間が好きだ。

例え抜かれても脇目も振らず、ただそこだけに真つすぐに、踏み込んで、早く、一秒でも早く。ゴールを過ぎ去って、勢いを落としてながら戻っていく。

「早いわー、もう同じ歳で勝てる人いないんじゃない？」

ハナちゃんがタイムを書きながら私に言うてくる。

確かに、私はいつから抜かれることも無く、自分の前には誰も走っていないかった。でも、私はそのことに満足していない。もっと、もっと早くならなきゃ。

交代するためハナちゃんに近付くと、さっき一緒に走った部員達が集まってくる。

「なんでそんな早いのか教えてよお」

「知りたいなあ知りたいなあ」

「ちよつとでいいから教えて、ね？」

うわあ、なんだかすごいことになっちゃったぞ。便秘の話じゃないけど、否決も何もないんだけど……。

「あ、ほら。あれじゃない？ 朝にちゃんと出してきてるからそれでスッキリ軽量化ってことじゃ」

ハナちゃんがそこまで言ったところで計測を記録しているファイルを奪い取って頭をパシーンと景気よく叩いておく。

「馬鹿言っていないで、早く向こう行きなさい」

ハハハと小走りでハナちゃんが去って行く。私達の漫才(?)を見て笑っている周りの女子も、シッシツと追い払う。

まあ？出した分だけ軽くなるつてもあるかもね。ボクサーとか減量時に血まで抜くっ聞くし……。って、私には別に関係ないから！単なる偶然、出したくらいで早くなかならないから！

変な考えを頭から追い払い、ハナちゃんが来るのを待つ。私が周りの子より早いのは体格とか、言っちゃ悪いけど才能的なことで勝てるだけだと思う。そんな排泄でタイムが縮んだりなんてそんなの私が信じたくない。

私の掛け声と共にハナちゃんが走り出す。



## 三人の少女、二つの結末、一つの日課

A J

「最初はグー、じゃんけんぽんっ！」

午前七時三十五分。木目調の扉の前で、二人の少女が向き合い、声を掛け合い、お互い手を突き出し合っていた。見れば、白色のセーラー服を纏う少女は手を開き、濃紺のジャンパースカートを纏う少女は握りこぶしを作っている……至極ありふれた遊戯の勝敗は、一手で決したようであった。

「じゃ、お姉ちゃん。私が先入るね」

勝者となった少女——大熊彩花は、露骨に得意な笑みを見せ、臙脂色のスカーフで飾られた胸を張る。

「負けちゃったけどさ、このままだとバスの時間ヤバイし、譲ってくれたり……しない？」

一方敗者は、負けを認めているようでも認めていないのか、眼鏡越しの上目遣いで彩花に尋ねている——彼女が姉の大熊楓佳ふうかであった。「それじゃ、じゃんけんした意味ないでしょ。二階の春ちゃんもうすぐ出てくるだろうし、別にいいじゃん」

楓佳の願いは、いかにも鬱陶しそうな表情の妹に一蹴される。

「ちょ、彩花ちゃんまだ時間大丈夫でしょ、私、すぐ済ませるから！」

そうして彩花が扉の内側へと入り、鍵を掛けても楓佳はなおも扉越しに食い下がっている。どうやら、諦めは悪いらしい。

「私だって時間ないもん」

「あれ、今日学校早いのか？」

「いや、テレビの朝の古い見逃しちゃうから」

「それだけの為に!？」

互いの姿を見ぬまま、応酬が続く——彩花は頑なだった。その声色に険悪な雰囲気は無く、姉妹仲は良好であるように思われるが、だからこそ妙な気遣いはせず、些細なことでは譲り合うことも無い。

「というかもう話し掛けないでよ。これから……するんだから」

結局、交渉は一方的に打ち切られ、楓佳の望みは叶わなかった。

「もう、時間無いのに」

扉越しの妹が、最早聞く耳を持たないことは分かっていたが、それでも声に出さずにはいられぬといった様子だ。確かに、楓佳は高校に進学してからバスで通学しており、その発車の時刻が迫っているのは事実である。逃しても間に合わぬことはないが、四キロメートルも、自転車を必死に漕ぐことになるのは、願わくば避けたい。

そのため楓佳も、扉の奥の彩花と同じセーラー服で学校生活を送っていた四か月前までよりも、余裕を持って朝の時を過ごすよう心掛けていた——心掛けてはいるが、上手いかぬ朝も少なくはない。

今朝は、学校に提出する書類が見当たらず、雑然さを極めた自室を搜索するのに十分以上の時間を費やした。

そうして焦りながらも身支度を整え、既に楓佳は学校生活を送るに相応しい出で立ちだ——見れば、身に着けた半袖のブラウスとまだ真新しいジャンパースカートの大きな皺はなく、胸の青いリボンが綺麗に結ばれ、足は制服とよく似た色の靴下に包まれている。

「はあ……」

しかし、いつでも家を出られそうな姿でありながら、今の楓佳は

落ち着きを欠いた様子だ。髪型は中学校卒業を期に変え、結ばなくとも済む程度に短くしたが、手持ち無沙汰になると髪を弄ぶ癖は相変わらずである。小刻みに体を動かしたり脚を組み替える度に揺れる校則通りの丈のスカートもまた目立っている。

ぐるっ……ぐるるるぐるっ……

「つつ……うっ……」

唐突に扉——厳密にはその内側にあるものを見つめていた楓佳の視線が落ちていく。向かう先は、女子生徒にあるべき清純に包まれた下腹部——たった今、微かに響いた音色の元である。

(こつちも……今日はきつい日かあ)

可憐と評して差し支えない純朴な童顔が、いかにも物憂げなもへと変わった。そして、髪の漆黒を捉えていた右手が、濃紺に覆われた腹に伸び、そこでゆつくりと円を描く……ぐるると、その機嫌を伺うかのような慎重さを持って、撫で回していった。

ぐうう……くるるるっ……ぐるるるっ！

「あうっ……」

楓佳の問いかけに対し、瑞々しい肌色の奥底に納められた臓物が、一層勢いを増したうねりを返す。彼女のどこか艶めかしい吐息に混ざる鳴動は、空腹の訴えにも似ていた。

(昨日も一昨日もつい調子に乗って食べ過ぎちゃったから……かな)

だが、楓佳は既に朝食を済ませている。それも、卵二つ分のスクランブルエッグに茶碗大盛りの白飯、付け合わせのひじきの煮物と、朝の貴重な時間を割いて作るにしては本格的なものだ。それだけ食べれば、いくら毎日の昼食として運動部に属する大柄な男子と変わ

らぬ大きさの弁当箱を空にするような、少女らしからぬ健啖さを持ち合わせた楓佳といえど、三十分も経たぬうちに更なる食事を求めるなどあり得ないはずだ。

(まあ、空くまで精々五分……それぐらい、余裕だけど……でも)

そもそも、腹腔の内て蠢いているのは胃ではなく、食物を日々の活力と変えてゆく消化というプロセスの末端たる大腸であった。その器官が最後に担うのは、摂食とは真逆の排泄である。食卓を彩っていたものの成れの果てが、ひとりでに消え去るはずもなく、いずれ体外に解き放たねばならない……そのような役目を担う器官が、音が漏れ出る程に激しく動いているということは、すなわち——

ぐるるる……ぐるるるっ……ぐううう……！

(したい……うんちしたいっ……早くうんちしたいっ)

——うんちがしたいということ。大便を排泄したいということ。便意という二文字で示される生理的欲求。それこそが、楓佳に突き付けられたものの正体であった。

(探し物のせいで、ちょっと我慢しちゃったけど……でも、こんなにしたくなくともいいのにっ)

楓佳の消化器官は常に健全そのもので、少なからぬ少女が苦しむ便通の滞りとは無縁であった。何ら手入れをせずとも、そのきめ細かですべやかな肌を維持できる所以の一つだろう。だが健全であるがために、その蠕動は時に命の拍動を思わせるが如き力強さを持ち、時に強烈な欲求という形で現れる。留めておけば毒となる老廃物。清くあるべき少女という存在とは真逆の穢れそのもの。そのようなものを、一刻も早く出さねばならぬと楓佳の本能は叫ぶ……今朝の

それは、平素よりも格段に激しかった。

きゆるるるるるっ……ぐるぐるるるっ……！

（うう……早くトイレ空いてよ。彩花ちゃんも春ちゃんも急いでよ……私だって、うんちしたいんだから）

だが、あくまで楓佳は理性的な人間である。いくら、体が「いつでもうんちができる」などと嘯こうと、許された場所以外で行為に及ぶことはできない。大なり小なりの排泄を行うことが許されている場所——トイレはこの一軒家には二か所存在していた。しかし、一階のそれは彩花が入ったばかり。二階も末の妹である春香が入っている——今まさに、二人の少女が、用便のために使っているのだ。（朝したくなるのはいいことだけ……同時つてのは困るよつ）

それぞれ高校一年生、中学二年生、小学五年生の三人姉妹。同じ屋根の下で暮らす彼女らは毎朝、排便を済ませてからそれぞれの学校に向かう……年齢も性格も異なる姉妹に共通する日課であった。

そのような習慣は、決して珍しいものではない。むしろ、毎朝の排便は世代・性別を問わず多くの者に共有されている。無論、彼女らと同世代の少女達にとっても同様だ。

毎日滞りなく為されるべき営みに、敢えて朝という時間が選ばれている理由はいくつか存在する。例えば、睡眠中に消化が進み、便が溜まるということや、空の胃に食物が送られる朝は、昼や夕と比べ蠕動が強いといったこと、そして朝のうちに済ませておけば、日中不意に便意を催さずに済むということ……最後の理由こそが、恥じらい多き年頃の少女達にとって、深い意味を持っていた。

小学校であれ、中学校であれ、高校であれ、学び舎である以前に

人が生活する施設として当然に、便器を並べた排泄のための場が用意されている。休み時間にそれら施設を利用することはごく自然なことであり、許可さえ得れば授業中に席を立つことも許されている。だからこそ、そこが学校であろうと、大便することに何ら障害はないはずだ。

だが、繊細で複雑な乙女心は、学校という場で大用を足すことを多かれ少なかれ恥と捉え、忌避感を抱く。それどころか、その行為を禁忌とまで考える者も決して少なくはない。誰もがすることだとは分かっている、産み落とされる醜い茶色は、少女のあるべき姿からかけ離れ過ぎている——そんな口に出すのも憚られる汚物と、自らの存在が確証を持つて繋がることは誰しもが避けたいと思う。むしろ避けることが、人の醜聞など容易に広がってしまう小さな社会で、時に残酷で容赦の無い幼さが牙を剥く空間で生きるための処世術なのかもしれない。

だからこそ、不幸にも学校で便意を催してしまった少女は、学校のトイレを選んで羞恥に悶えるか、家のトイレを選んで苦痛に悶えるかの二択を迫られる。欲求が切迫していれば、選ぶことすら許されず、行為を強要される。場合によっては相当の勇気を振り絞り、級友達の注目を浴びながら授業中に席を立つという事態も起こり得る。

もちろん、少女の心は千差万別であり、抵抗を抱かず大用を足す者もいる。行為を恥と捉えながらも、それを容易に受け入れるだけの強さを持った者もいる。心の成熟と共に、何ら身構えることなく行為に至る者も増えていくだろう。

しかし楓佳は未だ、学校で大便をするということに、相当の抵抗を持つ——お世辞にも社交的とは言えない楓佳は、集団に上手く馴染めず、また会話も所作も生来の不器用さがどうしても拭えず、周囲のからかいを受けることが多かった。それらの大半に強い悪意はなく、真剣に言い返すまでもない冗談の類だったが、それでもそう親しくも無い人間から向けられれば、心に傷を付けることとなる。そうして、小さな引っかけ傷でいっぱい、楓佳の心は、これ以上の傷を、自覚なき悪意を恐れていた——小学生の頃に、学校での排便を手酷く揶揄された記憶も、未だ楓佳の脳裏に焼き付いている。

常に明るく笑顔を振りまく社交的な中学生である彩花も、その内面には人並み以上の奥ゆかしさと恥じらいを抱え、学校での排便を禁忌と捉える。物静かながら長姉とは異なり広く器用に人間関係を築く小学生の春香も、恥知らずと後ろ指を指されかねない行いは、可能な限り避ける——やはり彼女らと、他の少なからぬ少女達にとつて、毎朝きちんと排便を済ませるということは、輝かしい日常に不安の影を落とさぬために必要な行いであるに違いない。

ぐううう……ぐるぐるるるるつ……！！

(トイレ……トイレ……トイレっ……)

だが今は、羞恥と苦痛を避けるためにある日々の行いに、楓佳は苦しめられている——毎朝確実に大便を出すことを習慣づけられた体は、たとえ目の前の扉が閉ざされていようと、楓佳が笑顔で胃に運んだ食事の成れの果てを下へ下へと送り出してくる。

「あ、彩花ちゃんっ……まだ掛かりそう？」

もじもじと小さく腰を揺すりながら、そわそわと脚をしきりに脚を動かしながら、楓佳は再び妹へ声を掛ける。焦燥を浮かべる理由が、バスの時間だけでないのは、見ているだけでも察することができた。

「も、もうちょっと待っててよ。じゃんけん負けたんだからっ」

急ぎたい楓佳に対し、彩花は無慈悲に答えを返す……それからすぐに扉から漏れた微かに力の籠った息遣いと、名状し難い粘ついた音が、彩花がまだ代われぬことを如実に示していた。

ぐるるるるつ……きゅるるるるるるるつ……！！

洋式の便器に腰掛け、肛門を全開にして、大便をひり出す……扉越しの音色から妹の姿を想起し、抱いてしまった羨望に引かれ、欲求の波が押し寄せる。一層激しさを増した大腸のうねりは、出したいのであれば出してしまえばいいと言わんばかりだ。

ぷびっ……ぷすううう……！！

(ちよ、ちよつとこれっ……やばいつ……うんちしたいうんちしたいうんちしたいっ！)

切迫する便意に揺さぶられ、眉が八の字に傾いていく。先程からしきりに下腹をさすり、制御の及ばぬ自らの体を宥めようとする楓佳だったが、迫る重みは出口の一手手前まで迫り、もう意識して尻を引き締めなければならぬ状態にまでなっている。

「はあ……ふ、ふうう……」

(さ、流石に家で漏らすなんてありえないしっ……すぐにうんちできるからっ……もうちよつと待ってよ私のおなか……！)

食べたらず。それが自然の摂理である以上、いつかは本能の訴

えに応えなければならぬ。特に、楓佳のような少女が持つ極めて活動的な消化器官は、下つても詰まってもいい一日分ですら留めることを許さない——済ませぬまま学校に行けば、一時間目の最中に手を挙げる羽目になつても不思議ではない。腹の具合が急激でなければ、二時間目、三時間目と堪え続けることも可能だが、自宅に帰り着くまでとなれば容易なことではない。

「つ、はあ……」

ぷっ、ぷびびっ……！

その意味では、快便体質は諸刃の剣でもあった。毎朝の排便が日常となつた以上、それを怠れば体は学校という場での行為を強く求めることとなる。仮にそれを拒否したとして、欲求は迫り、出すべきものが腹腔の内で暴れ回り、そしていずれ限界が来る。最後には、全身全霊を込めて尻穴を閉じようと勝手に開いていき、どれだけしてはならないと心が叫ぼうと勝手に力が抜けていく。外ならぬ楓佳も、一度ならずそのような幼稚極まりない失態を経験している。

ぐうううぐうぐるぐるぐるるるるるっ！！

（うんちしたい……まだ代われないのっ……早く、早くうんちしたいのに……！）

有無を言わさぬ極限の欲求を知る楓佳。彼女にとつて、今襲うそれは、まだ危機とは言ひ難い。ただ、便塊を抱えた腹の圧迫感が苦しく、そこをさすり撫でるのを止められぬ程度。出したいと思う心が頑なで、小刻みな足踏み止められぬ程度……ただ一刻も早く、妹達がするのと同じように、便器に向かつて自らの腹の中身を放つてしまいたいのは事実だった。

「ふうちゃん、トイレ空いたよ……待たせてごめんね」

まだ三分程しか経っていないのに、再び扉を叩こうとしていた楓佳の手を止めたのは、用便を済ませたばかりの春香だった。小学生ながら物分かりの良い少女は、自宅とはいえ抑えもせず、幼稚な仕草で自らの欲求を表現している五歳も年上の姉を見ても呆れず、待たせてしまったと謝つてみせた。

「ありがとう春ちゃん。こっちこそ急がせちゃつてごめんね」

訪れた朗報に、久方ぶりの笑みを見せた楓佳は、妹との会話もそこそこに階段へ向けて歩き出す。目指す場所は、言うまでもない。ぐきゆるるる……ぐるるるるる……ぎゆるるるるるっ！！

「はっ、ううう……」

間近に迫つたその時を目指し、消化管の動きがにわかに活発なものとなる。それでも経験上、限界までもうしばらく余裕があるとは分かつていたが、一秒でも早くこの腹の重苦しさから逃れたい楓佳は、幼い子供がするように激しく音を立てて階段を駆け上がる——昇り切れば、すぐに扉が目に入った。

ぷっ、ぷっ、ぷっ、ぷびっ……！！

（トイレっ……！ やつと、やつとうんちできる！！）

乱暴に扉を開け放つと、楓佳は白色の洋式便器と向かう合う。そこに飛び込むのに迷いはない。学校という場であれば、葛藤に満ちた表情を浮かべ、時には扉の前で逡巡することもあろうが、ここは自宅——楓佳にとつて、何の不安も無く大便が出せる場所である。（うんち出そうんち出るうんちがでるっ！！）

ミチミチチムリユリユリユリユリユリユリユリユリ!!

思はず声が漏れる。目を向ける先にあるものは、間違ひなく楓佳が放つた便塊——ただそれは、指三本分ほどの太さを持ち、長さは三十センチに達しており、平素から快便を誇る楓佳といえど驚くような代物であった。地味ながらもあどけない愛らしさに満ちた相貌

を持つ少女の、決して大柄とは言えぬ均整の取れた肉体の内に、このようなものが眠っていたとは、誰が想像できるだろうか。

(……一昨日の夜の、おイモかなあ)

苦笑いを浮かべ、思い起こすのは二晩さかのぼる食事。別の料理もあったが、印象深く残るは茹でただけのジャガイモに、ひたすら塩とバターを掛けて食べたこと——大好物が、いくつその強靱な胃袋の中に吸い込まれたか。今となつては、知る術はない。

きゅるるっ……ぐるるるるっ……！

「あつ……」

圧倒的な大物を出して、今頃すつきりとしているはずの下腹が、再び鳴動するのを感じる。繰り返すとおり、空腹の訴えであるはずもない——

(……まだ、出そう)

——それは、まだ出すべきものが残っているというサイン。

「うろうんっ！」

ミチチニルルルッ……ブリッ、ブリリリッ！

音を立て、次々と汚物が水面へ飛び込んでいく。先に放った一本よりは細切れだったが、色と固さは相変わらず健全そのものだ。

「ふうう……ふ、んんっ！」

ブリリリブリリッ……ブッ、ミチチニルルルッ……ニチチッ！

悪臭に染まった空気で肺を満たしながら、楓佳は愚直に欲求に応え、腹の内の残るものをひり出していった。体の全ては椅子と同じ形をした便器に委ねられ、ただ腹と尻にだけ全ての力が注がれている。

「はああ……ん、んんううう！」

一挙に行為を終わらせるべく息むその声色は野卑そのもので、浮かぶ相貌は崩れ切っていた。少女としてあつてはならぬ光景に違はなく、しかし少女として絶対に避けられぬ行い——日々繰り返される矛盾が、たったの扉一枚で覆い隠されている。

プリュリュリュ……ブッ……ブリリッ……ブチュッ……！！

「はあつ！　ふううう……」

そうして音と立ち込める悪臭の根源を放ち続けた肛門が沈黙を迎えた。尻の下には、既に見た大物に加えて、バナナほどの塊から、細切れになったものまで折り重なって便器の内に鎮座している。流石に他者のものを見る機会はないが、それでも書物で得た知識から、平均よりも量が多いという自覚はあつた。

(…………すつきり、した)

すっきり軽くなつた腹を抱き、排泄の最中とは質の異なる、得も言われぬ爽快感に身を任せ、楓佳はただ便器に腰掛けたまま呆けていた……：時間に追われているという事実を思い起こし、その緩み切った相貌に再び焦燥を浮かべるまで、三十秒近い時間を要した。

「んっ……」

楓佳はすぐさま、叩き付けるかのような勢いで温水洗浄便座のスイッチを押した。すると、強めに設定された水流が、みるみるうちに汚物の付着した尻の穴を洗い流していく。普段ならば、弱めの水流でゆっくり時間を掛けて行うところだが、今日はそうするだけの時間がない。

洗浄もそこに、手に取った紙で数度尻を拭う。それが終わる

と同時に、膝まで下ろしていた下着を上げ、スカートをはたいて形を整えてやる——これで楓佳という少女は、清純と可憐に立ち返った。

「——ふう」

一仕事終えたと言わんばかりに息を吐き、レバーを倒し、水の流れる音が終わらぬうちに楓佳はその場を後にする。臭いだけは残していくこととなったが、それもいづれ消え去り、彼女が大便を出したという事実は葬り去られるだろう。

「あ、お姉ちゃん。もう四十分過ぎてるけど大丈夫なの？」

「だ、大丈夫じゃないっ！」

朝の時間は概して貴重なものであり、今日の楓佳のように時間に追われる朝も珍しくはない……ただそれでも、相応の数の少女が、朝に大便をするを選ぶ。日々の健康のために。そして何より不要な恥や苦痛を避けるために。

「行つてきますっ！」

そうして、楓佳は慌ただしく駆け出していった——その体の軽さに、心地良さを覚えながら。

\*\*\*

「彩花って結構お姉さんのこと好きだよな。よく話してるし」

午前八時を僅かに過ぎた頃。白を基調とする夏用のセーラー服に身を包んだ三人の少女達が、連れ立って歩いていた。

「いや、ないないっ！ 地味だし、抜けてるし、ずぼらだし、今朝

だって……はあ」

他愛もない会話を交わす彼女らの姿は、いくつか見える同じ制服姿の人影に溶け込み、平和な朝の情景の一つとなっている。

「今朝？ ケンカでもしたの？」

「……いや、そういう訳でもないけど。朝から焦らないで済むように、前の日とかから準備しておけばいいのにつて話」

「よく分からないけど、朝からなんか賑やかで楽しそうだけどなあ……彩花の家はいいよね。お姉さんも妹もいて」

「まあ春ちゃ……妹は可愛いって思えるかな。時々だけど」

雑談は、彩花と呼ばれた少女と、その左隣を歩く小柄な少女を中心に進んでいた。

「素直じゃないなあ……あ、加奈のお姉さんも滅茶苦茶美人だし、勉強できるつて聞くし、憧れるなあ」

「えっ、ああ……そうは言っても、家ではいつもだらけてるし、外面だけは良いつて感じだよ」

そして、どこか上の空な面持ちで二人の話を聞いていた少女——杉山加奈は、話し掛けられたことに一瞬遅れて気が付き、慌てて反応を返していた。話しぶりは至って普通で、十四歳の少女らしい成熟とあどけなさを同居させたその相貌にも乱れは無い。

「加奈、今日はちよつと口数少ないけど、大丈夫？」

それでも彩花は、加奈の反応に違和感を覚えたようだった。覗き込むその表情には、どこか心配の色が混ざっている。

「……………いや、全然大丈夫だよ。気のせい気のせい」

予想外の言葉に、一瞬だけ二の句が継げなかった加奈だったが、



すぐさま手を顔の前で振って、彩花の気掛かりを否定してみせた。

「えっ、なにになにつ？ 加奈具合悪いの？」

「いや、私の気のせいだったみたい。誰かさんみたいに、急に倒れられても困るから、聞いておこうと思って」

含みのある彩花の言葉に、加奈に代わって小柄な少女がたじろぐ。

「あ、ああ……その節はどうも。いやあ、普段減多に体調崩さないから、本当に酷くなるまで自覚無かったりするんだよねえ」

歩きながらの会話が、続く。いつも通りだと語るものの、やはり加奈は積極的に言葉を発さず、愛想笑いを浮かべ、時折相槌を打つばかりだった。

（彩花は、相変わらず鋭いなあ……………）

だからこそ、彩花は加奈の奥にある何かに気が付いたのだろう。

中学生になって、いつしか彩花と加奈はお互いを「ちゃん」付けで呼び合うことを止めていた。しかし、呼び方が変わろうと、従前の通りの交友が続き、こうして毎朝顔を合わせている……それ故に、言葉にせずとも理解できることも、理解されることも時にはある。

ぐうううううきゆるるるるるるるるつ！

「……んっ」

加奈の、白色のセーラー服で覆ひ隠された下腹から、くぐもつた音が響く。音自体は、友人達の声によつて容易にかき消されたが、加奈自身は聴覚以外の感覚でそれを感じ取る。その強さも、そのよくな響きを奏でるに至つた自らの腹の具合も、全て知つていた。

ぎゅるるっ……ぐるぐるぐるぐるるるっ！！

（ああっ……はやくトイレっ……うんち……うんちがしたいっ！）

その響きは強烈な大腸のうねり。うねりは、体の内に秘める固形物を運び続け、本能が出口を開けると訴えている——加奈の思考を支配するのは、大便といった二文字に過ぎなかった。

（お腹苦しいっ……早くっ……早くはやくはやくっ！）

消化管を突き進む便塊は、本来であれば自宅を発つ前に出せるものだった。劇的に膨らみ加奈を苛む欲求は、今朝も満たせるはずのものだった……彼女の姉が、一週間にも及ぶ便秘の産物で、一つしかない便器を詰まらせなければ。

逃げるようにそそくさと、しかしながらすつきりとした心地で家を出た姉とは対照的に、加奈はもどかしさともやもやとした腹を抱えたまま出発の時を迎えるしかなかった。今日だけは催さないでと切に願うも、毎朝の排便を欠かさぬ彼女の消化器官は、規則正しく健康的であった。

ぐうううう……ぐるぐるぎゅるぐるるううう！

（もうっ！　なんで今日に限って、こんなに急にしたくなるの……）

無視できる。願わくば放課後を迎えるまで無視したい。そう考えられたのは、最初の五分だけだ。

その便宜の高まりは、かつてない程に急激だった。治まれと祈る心に反し、うねりは激しさを増すばかりだった。すぐに平静を装うのが辛くなったが、それでも顔面に笑顔を張り付け続けた。通学路の半ばに差し掛かる頃には、排便のことのほか考えられなくなっていた。そしてそこからの道のりは、歩き慣れた通学路だというのに、長く果てしなかった。

「……」

「だめっ……もうちょっと、もうちょっと……我慢っ」

そうして今や切羽詰まった加奈だったが、揺れる長く艶やかな黒髪は清楚を、胸元の臙脂色と身体を包む制服は清纯と規律を体現し、未だ少女らしい様である——まさか、歩く先に見える校舎に向けられたその瞳が不浄の場所を捉えているなど、笑顔のその裏に強烈な便意を抱えていることなど、考えようがない。

「でも、もうすぐ夏休みかあ……加奈は何か予定ある？」

一度は違和感が付いた彩花さえも、疑念を払い、いつものように加奈へ話題を振る。その親友が、猛烈な排便の欲求を堪えながら、なんとか会話を続けていることにはまるで気付かぬ様子だ。

「ん、この夏から、塾に入るぐらいかなあ」

普段の加奈は決して物静かな人間ではなく、話すことも好きだったが、今ばかりは他に集中したいことがある。ただ、抱えた汚物と切望する行為の名は、例えば親しい友人が相手であろうと口に出せるものではなく、結局のところ加奈は尻と腹に向けていたい意識を、隣の笑顔に向けるしかない。

「へえ、もしかして私と同じとこ？」

友人達の声を鬱陶しいものなどと思いたくはなかった。たとえどんな時であっても……罪悪感が胸がちくりと痛む。

「いや、駅前のとこだから——」

「ごろごろっ……きゅるるるっ……ぐるるるるるうう!!」

「——っ、違う、ところだね」

そうして平静を装うべく話す間にも、狙いすましたかのように、腸壁が激しく上下に揺れる。固さあるものに押される鈍重な痛みも

強いが、波のように押し寄せ続ける欲求が何よりも辛かった——大便が出したくてたまらなかった。便器が恋しくてたまらなかった。

（もうすぐ学校に着く！ もうすぐトイレっ……トイレに行ける！）

しかし、終わりは確実に見えてきている。三人はちょうど校門をくぐったところで、校舎までもそう距離は無い……それは、尻を晒してしまえる場所が近付いているのと同義であった。

（うんちできるっ……はやく、はやくうんちしたいっ！）

学校という場で、安息ならざる場所で、大便をする。それに対して思うところが無い訳ではなかったが、覚悟はできていた——誰かに音を聞かれてしまってもいい。臭いを嗅がれてしまってもいい。自身が大便をしたと知られてしまってもいい。そのように考えられる程度には、加奈を襲う衝動は激しい。

「んう……っ、う……ふうう……」

とはいえやはり、事情を告げてその場へ駆けることはどうしてもできなかった。恥を受け入れる勇氣と苦痛を避ける合理的思考を持ち合わせ、学校での用便も幾度か経験している加奈もまた、多感な十四歳の少女だ……隠したいと思う心は、不合理でも幼稚でもなく、成熟した女性に備わるべき矜持だと考える。

「でも、遂に加奈も塾通いか……みんな真面目だねえ」

「いや、友恵は行かなくても余裕でしょ。むしろ私達に教えてるし」  
一歩進むごとに、個室の並ぶ情景を浮かべ、強張る表情を努めて緩める。舗装された地面を踏み締める度に、白色の陶器の像を浮かべ、乱れる呼吸を整える……迫る茶色に抗いながらも、必死に彼女は、ありふれた登校中の女子中学生を演じ続けていた。

ぐるるるるるっ……ぐるぐるぐるるるるっ……!!

そうして、相も変わらずと唸る腹を抱え、重たい一步一步を乗り越え、加奈は校舎の入口に辿り着いた。確実さを増す「もうすぐ」にその鼓動を速め、しかし一方「出したい」と願う心を宥めながら、残る距離を詰めていく。

「えっと、私、職員室に行く用事があるから、先に教室行つて」

上履きに履き替えるや否や、加奈は教室へ向かおうとする友人達に對し、一息に告げた。本人としては冷静なつもりなのかもしれないが、台本を読み上げるかのように口を衝いた言葉からは、焦燥が滲み出ている。

ぎゅるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる!!

「どうしたの？」

欲求が扉を叩くその荒々しさに、口をすぼませかけたが、目の前には怪訝な表情を向ける友人達がいる——右手でスカートの裾を握り締めながら、その腹の事情を物語る制御不能の鳴動が、親友の耳に届いてしまわぬよう、加奈は切に祈っていた。

「部活のことで、話があるって」

（はやくトイレっ!……トイレ、うんち、はやく、したいっ!!）

「ふうん……次期部長は大変ね」

肛門が震え、そしてそこから悪寒が全身へと拡がっていく。絶対的な、その意思に関わらず行為を遂げようとする、おぞましい衝動がそこにはあった。

「そうそう。部長は大変なんだよ」

「部員四人の文芸部でも？」

「もちろん。なんたつて初代部長だし」

悶える最中、聞き慣れた友人達の声が、どこか遠くに聞こえる。未だ表情は崩れていなかったが、もう会話の内容は頭に入っていない……限界は、彼女のすぐ傍まで迫っている。

「じ、時間無いから、私行くねっ!」

そして遂に、最低限の取り繕いと共に、加奈はその場を逃げ出した。心配そうな視線が背に向けられていることは分かっていたが、もしも目が合えば今度こそ抱える腹の事情まで見透かされそうで、振り向くことはできなかった。

「ふうう……ふうう……ふ、ううう……」

ぎゅるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる!!

廊下を歩く加奈は、もう苦痛に歪む相貌を隠しはしなかった。動かさなければならなかった唇も強く引き結ばれている……加奈の意識の全てが、開かれようとする排泄孔に向けられていた。

（ああ……漏れちゃうっ! うんち、もう、だめっ!!）

その引き締められた穴に、今この瞬間も堪え難い質量が押し寄せている。大腸は正しく、あるべき排泄を果たすべく蠢いている……その全てが、加奈が物心付いて以来一度たりとも犯したことのない失敗を想起させる程に、抗い難かった。

病的な下り模様ならばともかく、たかだが一日分の欲求を、精々三十分程度堪え切れぬなどあり得るだろうか……今の彼女であれば、今より身も心も幼く割り切れなかった頃に、朝から放課後まで耐え抜いた記憶をかなぐり捨てて「あり得る」と答えるだろう。毎朝の

「……」

(もうちよつと……もうすぐつ……うんち、といれっ!!)

保健室の対面に設けられたその女子トイレは、教室の目と鼻の先ということはなかったが、三年生の教室まで遠くはなく、常に人氣が無いとは言い難い。もつと適した場所も浮かんだが、今の加奈にはここまですが精一杯であった。

(トイレ……トイレトイレっ!!)

ぐうううううゝぎゆるぎゆるるるるごぽぽぽっ!!

おぞましさを極めた鳴動が響いたのは、ちようど加奈が扉へと手

「うああ!?! つ、うつ、ぶうつうつ……!!」

それから構える間もなく、暴力的な欲求が、安堵に緩みつつあった加奈の心と体を襲った——限界が来てしまったという自覚が確か程にあった。ここで出してしまうしかないという諦めすら浮かぶ程に、  
 獐猛な、かつて経験のない圧倒的な便宜が、重く鋭く突き付けられている。

（やだっ、うんち漏れるうんちもれちゃうっ!! もうむりげんかい  
がまんできないっ!!）

すぐさま加奈は扉の中へと飛び込んだ。尻のすばまりに片手を添え、おぞましい形相を浮かべ歯を食い縛る加奈の姿は、決して他者には見せられぬものに違いなかった。

ごぎゆるるるぎゆるるるぐううう!!

(うんちもれる……でちゃう……うんち、だめっ!!)

屏から最短の個室にあるのは、古めかしさを感じる和式の便器である。奥には洋式の便器も存在はしていたが、今は選り好みをしている時ではない。すぐさま叩き付けるように鍵を掛け、汚れるもの気にせず背負っていた鞆を床に放り投げる。

「はあああああつ!!」

## ◇ 参加者紹介 ◇

●もちづきうずめ @scuzume\_at

社会不適合を噛みしめるうんこマン。お家でゆっくりするのも、投稿途中の急いで踏ん張るのも、学校でそわそわしながら息むのも、女の子の朝うんちが大好きです。

お嬢様の前でうんち恥ずかしいガールをすこれ。

PixivID : scuzume\_at

●とん @kzyn001002

シートはタオル地派な生命体です。合同誌発行、おめでとうございます。毎朝快便にも色々な形があるのかなという事で、今作は言うなれば「毎朝快便ガールが爽やかに一日を送れるに至るまでのお話」です。自分の嗜好に素直に、そのままの一作、お楽しみ頂けたなら幸いです。

PixivID : kzyn001002

●軟球<sup>じやうきゅう</sup> @nainainojnsi

【軟球<sup>じやうきゅう</sup>くるふ】です。基本は小メインだけど大もいけるお兄さんだよ！

あまり書かない大にチャレンジしたけど大丈夫かな？  
よろしくね！

PixivID : moremore55

●AJ @203\_kerty

少女排泄表現開発事業団職員 兼 Lolisca Library 管理人のAJです。毎朝快便ガール、とっても素敵ですよ。

勿論、お腹下しがちガールや、お便秘ガールも良いのですが……このところ Pixiv の方の投稿が滞りがちなので、そういう意味でも「良好なお通じ」を目指したいものです。

PixivID : 8227158milk

HP : Lolisca Library

<http://lolisca827.sakurane.jp/>

今回(も)うずめ様より合同誌のお話を  
いただき参加させていただきました☆  
しかも黄金系! かなり攻めてますよね…  
女の子の秘密の花園はどうなっているのか、気になりますっ!

毒桃

あちらさま

ダニ

